

鵠沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 9 4 号

第1特集 理想を追い求めた出版人 第一書房社主 長谷川巳之吉

1. 鵠沼を終の栖に 鈴木三男吉・岡田 哲明 ... 1
2. 鵠沼の歴史的家屋をたずねて⑬
- 長谷川巳之吉の住んだ家 岡田 哲明・佐藤 弘 ... 18

第2特集 鵠沼の地名

1. 鵠沼という地名を考える 小林 政夫 ... 25
2. 全国に鵠を追う〜グイ・グ地名分布とその特色 渡部 瞭 ... 28
- エッセイ 床屋という場所 中島誠之助 ... 32
- 鵠沼伏見稻荷神社の創建について 田村 進 ... 34
- 東京タワーの設計者 内藤多仲と鵠沼 岡田 哲明 ... 37
- 大給子爵家こぼればなし 渡部 瞭 ... 41
- 今井達夫遺稿① 遺言書 今井 達夫 ... 49
- 「鵠沼を語る会」活動の記録 総 務 部 ... 60
- 編集後記 63

『新編相模風土記稿』(天保13年、1892)に、「鵠沼村久久比奴末牟良」とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵠 沼 を 語 る 会 発行

理想を追い求めた出版人

第一書房社主 長谷川 巳之吉

～^{つい}鵠沼を^{すみか}終の栖に～

会員 鈴木三男吉

会員 岡田 哲明

プロローグ

「活字文化をできるだけ残していこう！」
これが現在の出版界の共通した標語の一つになっている。

以前は、1本1本の活字を1ページ分に組み上げ、それにインクを塗り、用紙を置いてローラーにかけ丹念に1枚ずつ印刷した。

これがグーテンベルクの印刷機発明以来の本来の活字文化である。しかし今や、この技法をそっくり残す事は不可能に近い。

結局は「文字文化をできるだけ残そう」ということになる。

それかあらぬか、昨今、どの書店の新刊棚にも安易な「新書版」が幅を利かせている。



長谷川巳之吉

かつて上製本の中にしっかりと収めてあった古典的著作までが新書版に姿を変えてお目見えしている有様である。こういう風景をみるにつけ思い起こすのは、「本づくりの名人」とまでいわれた第一書房社主、長谷川巳之吉である。第一書房といえば、豪華本と雑誌セルパン、戦前の出版界の歴史に一時期を画した出版社であった。

長谷川巳之吉はもともと詩人であり情想豊かな人であるのは当然であるが、私達は第一書房の創業から廃業に至るまでの歴史を調べるうちに、彼が徹底した「果敢即行」の人であることに気付いた。そして第一書房の歴史の節目節目に、すべてこの「果敢即行」が「天の声」として主役を演じていることを知った。結果は全て良し。廃業の時は版權をそっくり他社に譲渡して、二度と出版はしないという固い決意をし、以後30年近い余生を鵠沼で過ごした長谷川巳之吉のプロフィ

ールと業績を逐ってみよう。

おいたち

長谷川巳之吉は明治 26 年 12 月 28 日、新潟県三島郡出雲崎井の鼻に米穀商を営む安部仲吉・モヨの長男として生まれた。事情あって生後間もなく出雲崎木折町の漁師、長谷川孫市・マトの養子となる。貧しいながらも養父母は巳之吉を慈しみ、後に「僕を養った十年間の育て方は慈愛と厳格との交響楽のやうなものであったと思ふ」と巳之吉は回想している。無学文盲ながら宗教心が厚く、正義感に富んだ養父母は巳之吉の人格形成に大きな影響を与えた。小学校を終えると漁師の倅としては破格の高等小学校に進学した。養父母は利発な巳之吉を学校の先生にしたかったのだという。しかし与板銀行支店長の強い要請で出雲崎出張所の住み込み給仕となった。支店長は養父との約束もあり毎晩夕食後に日本外史を教えた。そのころ『少年世界』を購読するようになり 3 年後、本店勤務となって頭取の家に住み込むと、新聞の続き物の講談を読み始め、新潮社の『文章講義録』の会員になる。読書人、長谷川巳之吉の誕生である。文学に目覚めた巳之吉は藤村、荷風に熱中し翻訳ものでは文学のみならず思想、哲学書をも耽読したという。

青年時代

明治 44 年、17 歳になった巳之吉は与板町の長明寺の住職、前波善学に英語の手ほどきを受ける。大正 2 年の正月、かるた会で田中信子と知り合い初恋をする。

信子も『女子文壇』を愛読する文学少女だった。田舎町の恋愛はすぐに評判になり、翌 3 年に巳之吉は逃れるように上京する。後を追うように信子も上京し、二人はやがて同棲するようになる。上京するとき前波善学から従兄弟で帝大生の松岡譲を紹介され、松岡の下宿で久米正雄、芥川龍之介、成瀬正一らと知己を得る。上京後は明治商業銀行に勤めていたが大正 5 年、岩波書店の番頭小倉武雄の世話で創刊準備中の太陽通信社の『黒潮』という雑誌の編集部に入る。これが出版界に関わるきっかけとなる。1 年 3 ヶ月『黒潮』にたずさわる間に徳田秋声、和辻哲郎、大杉栄、佐藤春夫、岩野泡鳴、生田長江、野口米次郎、らを知る。太陽通信社社長と雑誌の経営方針をめぐり対立、辞表を提出する。次に玄文社に移り出版部主任となる。玄文社では雑誌『新演芸』『新家庭』『花形』『劇と評論』詩誌『詩聖』を刊行した。森鷗外、堀口大学、松村みね子、萩原朔太郎、日夏耿之介らを知る。が玄文社はもともと伊藤胡蝶園という白粉会社おしろいがスポンサーだった

ため、世俗的な編集方針であった。高い品性と知性を併せ持つ雑誌作りを目指す
巳之吉の理想とは相容れず、やがて玄文社も辞めてしまう。

第一書房設立

すでに信子との間に二人の子供がいた巳之吉は松岡譲に相談、松岡に自費で出版をはじめたらどうかと勧められ、自ら立つことを決意する。

出版社の名前は二人の合作で「第一書房」と決めた。ほどなく、巳之吉は咯血する。病床で焦る彼に救いの手を差し伸べたのが松村みね子で夫の遺産から 1560 円を用立ててくれた。

早速、芝高輪南町 6 番地に社屋兼住居を構え
大正 12 年 6 月 19 日東京朝日新聞に松岡譲著
『法城を護る人々』の 3 段抜きの広告を出して
処女出版を果たす。

ここに「第一書房設立の趣意」と題する一文があり長谷川巳之吉の出版に対する考え方と意気込みを知ることが出来る。



松岡 譲 著

『法城を護る人々』上中下

「今日の出版界を見ますと、極めて少数の^{しじつ}摯実な人を除きました外は、多く邪道に陥って概ね俗流に^{おもひ}阿り過ぎてゐはしまいかと思はれるのであります。本来出版事業なるものは、単なる一片の営利事業ではなく、それは実に文化の基礎工事とも云ふべきもので、同時に文化を促進して世を導いて行くべき一種の予言的性質を帯びてゐるものでありますのに、現今の如く日に日に悪化して行く出版界の傾向は誠に残念の事と存じます。若し斯かる悪時流がこの上に^{ちやうりようぼつこ}跳梁跋扈しますれば、心ある著作者は書齋に隠れ、真に良書を求めんとする読者は、遂に新刊書に見切りをつけるやうな大事が起らないとも限らないのであります。此間に処して私一個の微力が果たしてよく此滔々たる時流を転向させ得るや否やは頗る疑問とする所ではありまするが、併し私は心ある筆者^{しやうげん}諸彦並びに読者各位の加護に依って、真理の上に最後の勝利の下されん事を念じ且つ信じて居るものでござい
ます。

事業の手始めと致しましては、現今最も^{ざつぱく}俗悪雑駁なものの横行する文芸方面に
先ず手をつけたいと存じます。それで隠れたる名作家を^{しやうよう}憐愍して其の全努力にな

った立派な創作なり研究なりを紹介するは勿論のこと、当然この国に移植さるべくして未だ移されなかった泰西名著の翻訳(翻訳は訳者を選ばなければ駄目です)等を第一着手として、それから哲学宗教音楽美術等の各部門に涉って我等が文化の花となり実となるものを世の識者に問いたいと思っております。」(以下略)

売れ行きは順調であったが、関東大震災で大損害を蒙る。大正 13 年、大田黒元雄と知り合う。財政的に苦境にたたされていた第一書房を彼が救う事になる。

大田黒元雄は巳之吉と同年の生まれ。父、重五郎は芝浦製作所専務取締役や九州電気軌道株式会社の社長を歴任した実業家である。裕福な家庭に育った元雄は若くしてイギリスに留学、帰国後は西洋音楽の紹介につとめた。大田黒は巳之吉の出版に賭ける情熱と私心のない誠実さに共感し資金援助を申し出たのである。

こうして大正 13 年には『佐藤春夫詩集』を刊行したのみであった第一書房は、大正 14 年には大田黒元雄『歌劇大観』『名曲大観』『西洋音楽入門』『影絵』松岡譲『法城を護る人々』(中) 土田杏村『恋愛論』岸田國士『チロルの秋』上田敏『上



『近代劇全集』

田敏詩集』を、翻訳本では松村みね子訳フィオナ・マクラオド『かなしき女王』堀口大学訳ジュール・ロオメン『科学の奇蹟』ポール・モオラン『レキスとイレエン』『恋の欧羅巴』ギヨーム・アポリネール『動物詩集』などを次々に刊行した。

特筆すべきは堀口大学の訳詩集『月下の一群』である。フランス近代詩人 66 作家の作品 340 篇を収めたもので、その後の日本現代詩壇に新時代を画す役割を担ったといえる。なかでもジャン・コクトー「耳」とギヨーム・アポリネール「ミラボー橋」は膨大な読者に愛誦された。

円本合戦と近代劇全集

かくして経営は軌道に乗り順調に推移するかと見えたが、経済不況は出版界にも影を落とし始めていた。

改造社が『現代日本文学全集』全 37 巻、各巻 5~600 頁で定価 1 円と言う計画を大正 15 年末に発表。当時、巨額の借金に苦しむ改造社が予約金ほしさに発案したと言われているが、たちまち 23 万部の予約者を獲得した。

出版界に電撃が走る。新潮社は『世界文学全集』を、近代社は『世界戯曲全集』を、春陽堂は『明治大正文学全集』を、平凡社は『大衆文学全集』『世界美術全集』を、誠文堂は『大日本百科全集』を、講談社は『講談全集』『修養全集』を、興文社は『小学生全集』をそれぞれ企画した。巳之吉の第一書房はこの円本合戦に参加する事を決断する。昭和2年『近代劇全集』全43巻、別冊、総目録、計45冊で対抗する事にした。そのため大田黒から7万円の融資を受けるが、その条件は「利益が出たときは折半、失敗の時は出資者の損失でよい」という約束であったという。

巳之吉は円本時代を乗り切るもうひとつの途を豪華版の詩書をさらに徹底させて少数限定の豪華本として刊行することに賭けた。昭和3年3月『萩原朔太郎詩集』の広告文に「これ年来の宿志にして我が詩集の装幀美はつひに確立せられたり」と記している。

この年、11月には社屋兼住居を麹町一番町に新築移転する。

山中常盤物語絵巻

その矢先、長谷川巳之吉の情熱を真底から揺るがすような事件が^{しめつたい}出来する。昭和3年12月13日の夕刻、ふと立ち寄った神田の一誠堂書店で岩佐又兵衛作といわれる「山中常盤物語絵巻」の八つ切り写真10枚ばかりを見せられる。写真にもかかわらず絵巻の迫力は目を奪うばかりであった。それが国外に流れようとしていると聞き、巳之吉の情熱と正義感が噴出、断固、買う事を決意。新社屋を抵当に借金し、手持ちの美術品を売り、電話までも処分して遂にこれを手に入れた。まさに暴挙である。このことは朝日新聞に絵巻の写真と3段抜き見出しで大々的に報道された。少々長いが経緯がよく分かるので全文を転載する。(転載にあたり常用漢字、現行のかなづかいとした)



危くドイツへー
岩佐又兵衛の傑作
やつじの事を止めた
國寶的大繪巻

心血を注いだ
一代の名作
牛若丸の大繪巻

山中の常盤物語

朝日新聞の記事

危くドイツへ岩佐又兵衛の傑作

やっとの事で食い止めた国画的の大絵巻

浮世絵の元祖といわれている岩佐又兵衛が畢生の努力を傾倒したと思われる国宝的傑作でしかも世に知られず一浮世絵蒐集家の手に秘蔵されていた「山中常盤物語」全十二巻、一巻四拾余尺、全長五百尺におよぼんとする一大絵巻が端無くもクリスマスを目的として渡日していたドイツの画商に二万五千円即金にて買い取られ、この国画的な名画が海外に持ち去られようとした危うい所を第一書房主、長谷川巳之吉氏が聞いて大いに驚き、漸く、この又兵衛の大作を日本の宝として残す事が出来たという喜ばしい話がある。

岩佐又兵衛は土佐派の流れをくんだ慶長寛永時代の巨匠で、繊細にして雄大な用筆、妍麗な色彩とによって、肉筆浮世絵を愛する人々にとっては垂涎おくあたわぬもので川越市にある三十六歌仙は国宝とされているもので、その作品は散逸して今は比較的少なく、本社村山社長が秘蔵する「堀江物語」一巻の如きは一雄編として世に知られたものである。

この「山中常盤物語」は当時しばしば絵巻の題材とされていた牛若丸の伝説に材を借りて、母常盤御前との間の悲しき物語を長編絵巻としたもので、額狭く下類豊かな又兵衛独特の人物が濃彩麗美な背景の内に活躍し、一つの画面に四百五十人の武者がその表情もとりに面白く描きだされてある上に、その一幅に盛られた画題は劇的に転移して、器具調度に至るまで繊細の筆で美しく描きだされている一大長編絵巻で、偶然にその絵巻を見たドイツの画商は、二万五千円を投じてそれを買求むる契約をなし、よき収穫とほくそ笑んだのであったが、既に所持金は一万数千円しかなかったもので、まず一万円を手金に置いてこれを購う約束をし神戸の某商会の裏書で手形を渡そうとしたのであったが、それでは手渡せぬと交渉の結果それならドイツまで持って来てくれれば、三万円でも五万円でも言い値どうりだすとて、いよいよ詰に入った一誠堂の主人が、この絵巻を持ってドイツにゆくまでの運びとなったが、この十三日の事であった。

偶然、長谷川氏が散歩の途中一誠堂に立ち寄り話を聞いて大いに驚き、その写真を見て即座にどうにでもしても買おうといいだして四日間の猶予を求めて、氏の麹町の新築の家を担保に置いて金を借りたり、所蔵の浮世絵を売ったり奔走して漸く去る二十日氏自身で京都まで出かけて十二巻の絵巻を抱く様にして帰って来たものである。

心血を注いだ一代の名作 世に知られず秘蔵した牛若丸の大絵物語

この絵巻は又兵衛が長く留まっていた川越の藩主松平家に蔵されていたものが、震災直後売り立てに出て三千五百円で某画商の手に落ち、それを名古屋の某氏が所蔵の価格一万円と称された^{しほうく}写楽四枚と交換して秘蔵していたもので殆ど世に知られずこの傑作の存在は、^{ぶんちゅう}文晁が画行脚の随筆に見える以外には知られていなかったというのも一奇で、秘蔵に秘蔵を続けて三百年の歳月をへているにもかかわらず色彩も少しも変化せず、銀絵の具の如きも少しも焼けずに輝いているほどである。

この絵巻は源家復興の悲劇の女主人公たる常盤御前が行方不明になった牛若丸の行方を尋ねて山中の宿に来た時、盗賊のために美しき十二^{ひとと}単衣を奪われ、この恥を見んよりはとて強いて賊の刃にかかって死に、一基の無縁塚と化しているのを奥州にいた牛若丸が夢に母の姿を見て、京に上ってくる途中、山中の宿に来てこの無縁塚に逢い、不思議な想いにて慰解去るに忍びず泊まった宿が母常盤御前の^{ひとと}非業の最期をとげた宿でここに牛若丸が策略をもって賊をおびきよせて仇を討ち、再び奥州に帰って挙兵の軍を集めて鎌倉の頼朝の許に馳せ参ずるという物語を描いたもので、大名のお抱え絵師をしていた頃の又兵衛が十年に余る歳月と心血を注いだ傑作と見られている。この買約の破れたのを知ったドイツの画商は非常に残念がって価格をせりあげて交渉を繰り返したが、この持ち主も名画の海外に出るのを惜しんで危うくもこの傑作の日本を去る事を止めることが出来たのであった。

長谷川氏はもちろん、友人の松岡譲氏なども非常に喜んで新春と共に是非この隠れていた名画を一般の展覧に供したいとの意向であるが、長谷川氏はこの全長八十間にわたる絵巻をいれるガラスの額縁をどうしてこしらえたらよいかと心配している。

(朝日新聞：昭和3年12月29日付)

註：ドイツの画商とは日本美術研究家フリッツ・ルンプ Fritz Rumpff(1888~1949)

を指す。フリッツ・ルンプは画家の父からジャポニズムの洗礼を受け 15 歳で日本語を在独邦人に習う。ベルリン王立美術学校に学んだ後、来日。「パンの会」に出入りし鴎外、白秋、李太郎、夢二、凡骨等と交流した。1914 年、第 1 次世界大戦に一年志願兵として青島に赴き日本軍の捕虜（熊本、大分、習志野の捕虜収容所に収容）となった。『浮世絵』『日本の演劇』『日本の民話』等の著書がある。

昭和4年10月、京都博物館にて「山中常盤」初公開。

昭和5年、モノクロ写真版による原寸大の複製を第一書房から出版する。

昭和9年、大阪と東京の三越で「長谷川コレクション岩佐又兵衛展」に出品。

雑誌『セルパン』の刊行

第一書房は『伴侶』というPR雑誌を昭和5年から発行していたが、昭和6年5月に『セルパン』と改題し、誌面を一新、64ページ定価10銭で販売した。



編集は斬新、内容も体裁も軽快であって、その広告文「パン屋のパンはとらずともこのセルパンを召し上がれ」で評判をとり「煙草は煙、知識は残る。バット買おうかセルパンか」という流行り言葉ができ、発売10ヶ月後には「セルパン」という名の喫茶店まで出現したそうである。巳之吉は卓越したコピーライターでもあった。

セルパンはフランス語で蛇の意、巳之吉の巳に因んだものだが、フランスでは蛇は純粹、叡知、明晰をあらわし、尻尾を自らの頭の中に隠した蛇は永遠の象徴とされる。

『セルパン』創刊号

創刊号は堀口大学の「詩二編」が巻頭を飾る。

「手風琴」

どこを押すと／そんな音が出るの／手風琴のやうに／膝に抱かれて？

「手風琴 又」

もっと手風琴を鳴らしてよ！／あなたの膝に抱かれて／あなたの指に弾かれて／のびたりちぢんだり／身もがいたり／息も絶え絶えな／そして鳴り高い／わたしは手風琴なのよ／もっと手風琴を鳴らしてよ！

編集後記には「この雑誌は誰でも実力のある人が書きたいものを勝手に書いて発表する雑誌です。頼まれて無理に書きたくないものを書く、そんな雑誌にははないうつもりです。従って門戸開放、力のある人はどんどん引き上げて行きたいと思っております」（以下略）と新人発掘に意欲的な巳之吉の姿勢がうかがわれる。

パールバック『大地』のヒット

昭和 10 年 9 月、パールバック著、新居格訳『大地第 1 部』を刊行。その 2 年後アメリカ映画『大地』の公開と日中戦争の開始という背景もあって小説『大地』は爆発的に売れに売れ、超ベストセラーとなる。

第 2 部『息子達』第 3 部『分裂せる家』を含め 3 百万部以上を売り尽くしたという。

パールバックの書いた物なら何でもいいという注文が相次ぎ、莫大な利益を得る。

8 万円近くにもなっていた大田黒の借金も全額返済することが出来たのである。



パールバック『大地』と
戦時体制版

戦時体制版と第一書房の終焉

昭和 13 年 10 月、巳之吉は戦時体制版と銘打った叢書を刊行する。ザラ紙、四六判、仮綴、定価 78 銭。これは今までの豪華版とは 180 度方針を転換したものであった。セルパン 9 月号の予告に「十五周年を迎え、青年期より更に本格的成長に向ふことをマニフェストしたわが第一書房は、戦時下、日本の燃え上がる挙国精神と、さらに精神、物資を一丸とする総合的長期建設時代を表徴する文化的使命に、一大革新と転回を与ふる計画としてここに待望の第一書房戦時体制版の刊行を発表する。」と宣言。これは国策に順応した「出版報国」の仮面をかぶった東亜主義への転向でもあった。出版物に対する言論統制も更に厳しくなり、国策に迎合しなければ出版事業そのものが存続できなかったのであろう。そこへ昭和 18 年から 19 年にかけて行われた国策による企業の統廃合が出版界にもおよんだ。有力な出版社が主体になって小出版社の営業権を買収するとか、数社が合併して新しい出版社を作るとかがなされた。第一書房も他社を吸収するか、廃業するか二者択一をせまられる。巳之吉は、きびしい時局のなかで自らの志す出版の限界を悟り、誰に相談することもなく廃業を決め、講談社に全ての版權を売り渡し、出版界から完全に訣別したのである。

鵠沼時代

昭和 14 年、2、3 年前から静養のためしばしば鵠沼ホテルを訪れていた巳之吉は鵠沼を永住の地と決め、小高い岡になっている鵠沼松が岡 1-17 のあたりを富士見坂と称して家を建て 5 月 6 日、移住する。なんでも鎌倉の弓の指南番の家であったものを移築し、西洋風にアレンジしたものであったという。大きな窓から富士山がよく見えた。地元の人々からは西洋館と呼ばれていた。鵠沼に移った巳之吉は『セルパン』7 月号から「鵠沼海岸だより」を連載し始める。

*

むかしから衣、食、住と言はれてゐるけれども、僕の信ずるところに於いては、苟くも志を抱いてゐる者にとっては住が先でなければならないと惟ふ。たとへ山小屋のやうな粗末な住であつても、その環境だけは第 1 位の最高峰を選ばなければならないと惟ふ。

*

僕は幸運にも鵠沼随一の地を得た。百坪たらずの土地ではあるが、ここは鵠沼一体の核心の地である。(中略)僕は五月六日午後、未完の家へ引越して来た。まだ電気がつかないといふのに。僕はうす暗くなった部屋の中をかけながら、江の島を見ながら、遙か遠く伊豆の山々を眺めながら、夕闇に彩られた翠松の香りをかぎながら、独り静かに僕は夕食をしたためた。

*

あまりに春の夜の月が愉しいので、私はあかりを消してショパンの幻想曲をかけた。複雑極まりなき自然の変化の中に常に純粹に毅然と聳えてゐる靈峰富岳に朝夕相接してゐることは、しぜんに私の心境を高飛せしめずにはおかない。その点まことに鵠沼の富士は私にとって第一である。そしてこの風光一体を居ながらにして展望し得る私の部屋は誠にめぐまれた楽しい住家である。

*

あんなに病身であつた僕が、鵠沼海岸へ転地静養してからこの二三年来全く病気を忘れて仕舞つたかと思はれる。

*

すぐ目の前の電線に遊んでゐる雀の声や動作を見てゐても、それはピチピチして色つやよく、東京の雀とは比較にならないほどの健やかさであることも悦ばしい。

*

このように鶴沼を讃美する文章を毎号に書く。

転居

しかし、やがて心境に変化が現れ、あれほど讃美した霊峰富士も「やはり朝も夕も眺めてばかりあるものじゃない。美しいが怖ろしくなることもある」といつて昭和 18 年には松が岡 3・19・20 に平塚の奥にあった農家を北欧風のどっしりしたものに建替え転居する。その翌年、前述のように第一書房の権利をすべて売却して出版界から引退したのである。

鶴沼夏期自由大学

鶴沼に移った長谷川巳之吉は林達夫ら鶴沼在住の文化人との交流を深める。昭和 21 年、長谷川巳之吉が言い出して鶴沼夏期自由大学を開いた。そのことを林達夫の回想から辿ってみよう。

《私と長谷川さんとの出会いは、たしか長谷川さんが戦争のおわりごろ東京から鶴沼に移り住んでからのことである。もちろんすぐ私たちは親しくなった。昭和二十一年に長谷川さんが云いだして「鶴沼夏期自由大学」というのを湘南学園の講堂で開いたが、これは長谷川さんを語る上で無視し得ぬ一つの「事件」であったと思う。鎌倉でもこの年の春「鎌倉大学校」（鎌倉アカデミア）が発足した。この方にも私は関係したが、本格的な大学になるには不自由極まる文部省の学校法人のうるさい規約に縛られねばならず、それを少しでも逃れるために一同四苦八苦しているうちに、それは挫折してしまった。当時一部の人に混同があったが、「鶴沼夏期自由大学」は、これとは全然違う。「鎌倉大学」もそれまでにない自由を目指す性格と内容のものだったが、「鶴沼夏期自由大学」の方は法規に縛られず GHQ の検閲にもかからず、自由にやれる仕組みのものであった。世の中が突然大きく方向転換して、新しい^{かたち}闊達な道を世の人は探し求めようとしていたが、丁度その矢先に出現した、これはカルチュラル・ソサエティーとでもいうべく、それは法に縛られる学校ではなくて自由な自主的勉学の場所であった。戦後三十年も経ってから朝日新聞が始めたカルチャーセンターの皮切りでもあった。それをやろうと企てた長谷川さんの鋭い勘と熱意には、何事につけ腰の重い私もその仕事の片棒を担ぐ気になったほどだから、何かそこにはアップツーデイトで新鮮にアピールするものがあったに違いない。

「鶴沼夏期自由大学」の特徴の一つは、関係した地元の文化人すべてが手弁当

の無料奉仕をやったことだ。この仕事に手足となって欲しい地元の若い人たちが学徒出陣に駆り出されたまま未だに帰還するものがなかったのには弱った。幸いにして只一人ヴォランティアとして働いてくれたのは波多野述麿氏（当時辻堂にあった電気通信大学教授）で、いろいろと講師との交渉から時間割の編成、その他の面倒な仕事を一手に引き受けてさばいてくれたのには助かった。

七月二十一日から一ヶ月の短い講座だったが、私達はその間、机の配置やその直しから拭き掃除に至るまで、文字どうり汗水垂らしてやった。長谷川さんも会計などの庶務ばかりか毎朝掃除をしたもので、私も東京の仕事のない日はもちろん手伝えるだけ手伝った。

講師の先生には鵜沼を中心に湘南地方に在住していた学者、芸術家、評論家、ジャーナリストら三十人程を選んだが、そのうち二十人近くの人々が趣旨に賛同して喜んで参加してくれた。私の記憶では、当時藤沢に住んでいた平野謙の「島崎藤村」の話が特に出色の出来栄えだという噂であった。私も「世界文学と国民文学」というゲーテの「世界文学論」を中心に今日の文学のあり方をさぐる話をし、長谷川さんも「チェホフの話」をして講師陣に加わった。

ひと月の間に日曜日が四回あったので、番外のアトラクションとして富永惣一の「西洋美術史」、芥川比呂志演出のチェホフの「熊」、邦枝完二の「六代目菊五郎との対談」（六代目は当時鵜沼に住んでいた）、それに GHQ から借り出せる短篇文化映画を予定した。富永は大事に疎開しておいて戦火を免れた 150 枚の、とっておきの見事な複製画を講堂の壁に張りめぐらして、それを解説しながら話をした。近頃はテレビなどで一般的になったこのパターンの美術講話も、そのときは渴を癒すものがあったて非常にうけた。「六代目との対談」は失敗であった。一抹の懸念があったので何度も念を押したが、邦枝が「絶対に連れてきて見せる」と自信ありげに太鼓判を押すのでプログラムにのせた。ところが当日になって邦枝が一人でしょんぼりと壇上に現れた。講堂に一杯の 250 人ばかりの聴衆は、がっかりして失望の色をかくさなかった。それで邦枝のしどろもどろの「菊五郎の話」の独演でお茶を濁すていたらくであった。しかし芥川の方は大成功であった。芥川はその頃まだ全く無名の演劇青年であったが、芥川龍之介の^{せがれ}倅だという口コミのふれこみがきいて前人気は上々であった。その彼が連れてきたのが加藤道夫とそのフィアンセだった加藤治子で「男女同権」時代にふさわしい芝居だということで「熊」を上演したのだ。（配役は加藤＝地主、治子＝未亡人、芥川＝従僕ルカ）—これは芥川が既に素人離れした、隅におけない演出家である実力を示した忘れ

得ぬ舞台となった。せいぜい地元で会社のやぼったい慰問演芸くらいしかのぞいていない一般の現象は、「新劇」とはこんなに面白い芝居なのかと、惜しみなく哄笑と喝采を送ったものである。私達一詳しく言うと、かつての演劇記者であった長谷川さんと、やがて演劇科の大学教授になる私の二人—このセミプロの二人にとっては、それは大型新人の出現という思いがけない拾い物をした一幕で、大いに気をよくしたものである。(以下略)》

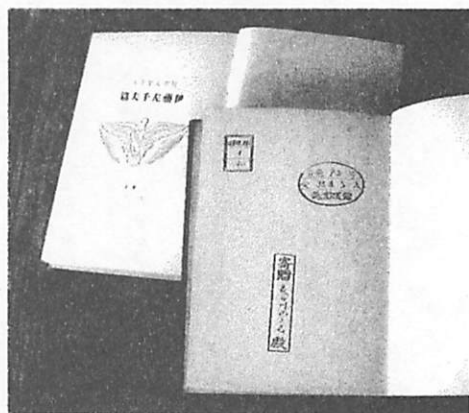
再転居

昭和 23 年～25 年に二男一女の縁談を取りまとめ、28 年には「山中常盤」を救世箱根美術館（現：MOA 美術館）に売却。翌 29 年の春に女婿、衣奈多喜男宅の隣、鵜沼松が岡 4-15-9 に再転居する。

鵜沼公民館に蔵書を寄贈

昭和 34 年 2 月、鵜沼公民館が開設され、同年、4 月 5 日付で長谷川巳之吉は第一書房発行『短歌文学全集』全 15 冊を寄贈している。

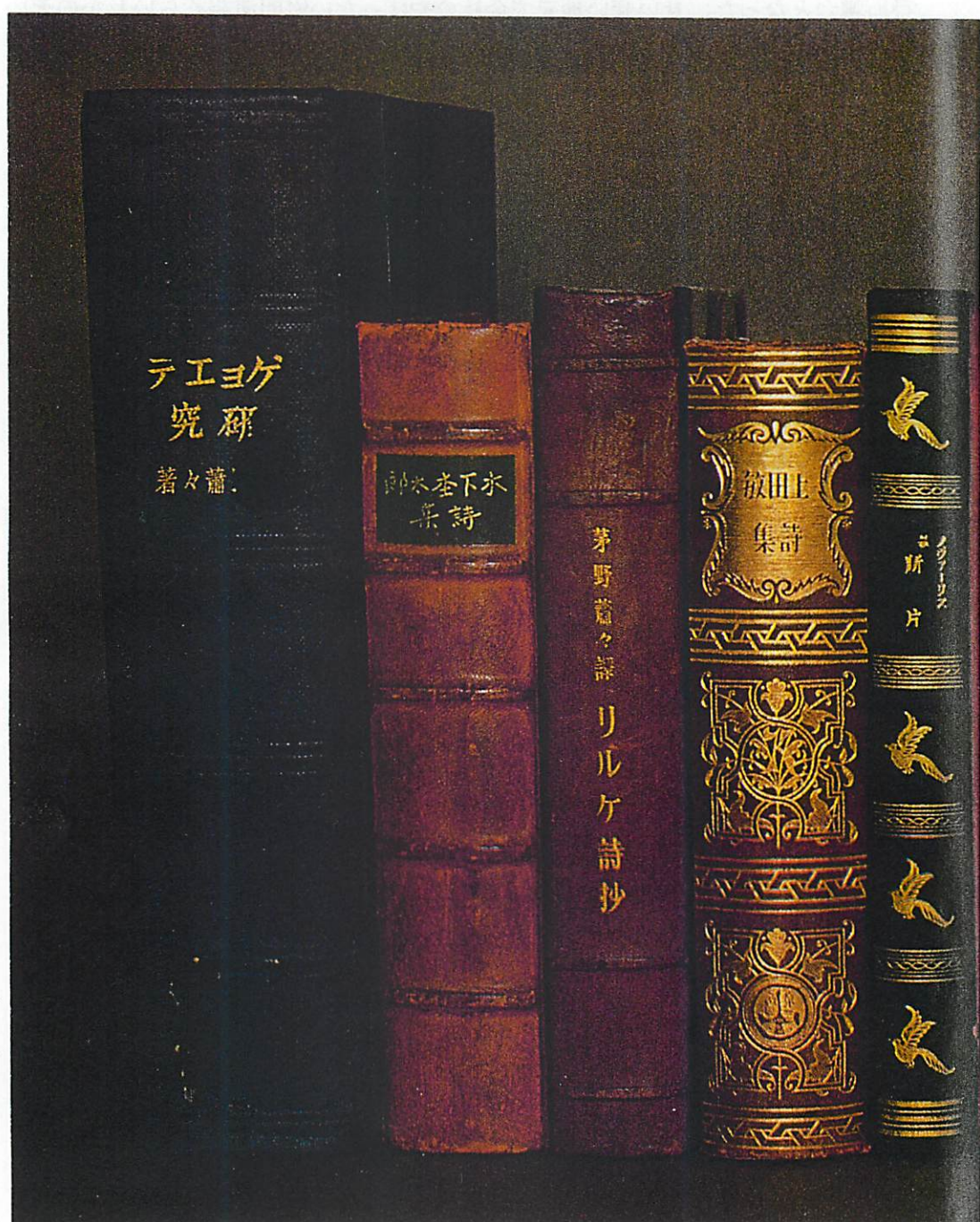
おそらく公民館内に設けられた図書室に常備する書籍の寄付を地域住民に募ったのであろう。見開きに登録 82 号、34.4.5 受入、鵜沼公民館のゴム印と、寄贈 長谷川巳之吉殿というゴム印とが押されている。



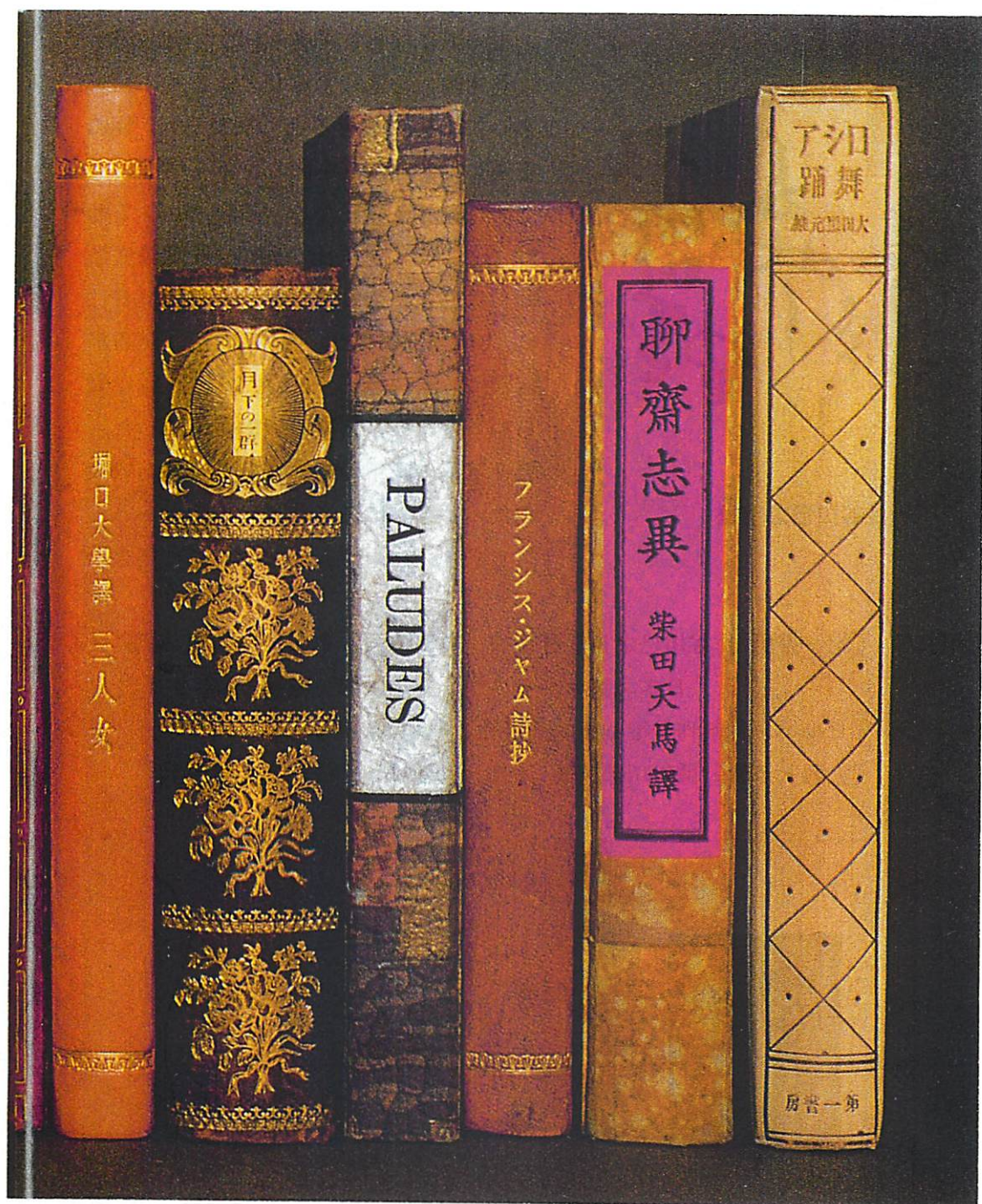
寄贈された『短歌文学全集』

この全集は第一書房が昭和 11 年 8 月から 12 年 10 月まで毎月 1 冊ペースで刊行したもの。若山牧水、石川啄木、与謝野晶子、北原白秋、前田夕暮、釈迢空、窪田空穂、木下利玄、島木赤彦、斎藤茂吉、佐々木信綱、伊藤左千夫、吉井勇、石原純、尾上柴舟の順に 15 歌人の歌集が配本されたものである。

藤沢市民図書館が出来たときに、各公民館蔵の主だった図書は図書館に移管されたもようで、この全集は、現在は大庭図書館に収蔵されているが、残念なことに寄贈されたうち 6 冊（ゴシック体）しか現存していない。



第一書房より刊行された数々の豪華版



右から5冊目が堀口大学訳詩集『月下の一群』の初版本。菊大判、背革、金泥装、749頁、4円80銭
1200部発行された。その後、大正15年、第2刷650部。第3刷500部。昭和2年、第4刷1500部。昭和
3年、新編2500部（この版は火災により焼失、絶版となる）と版を重ねた。

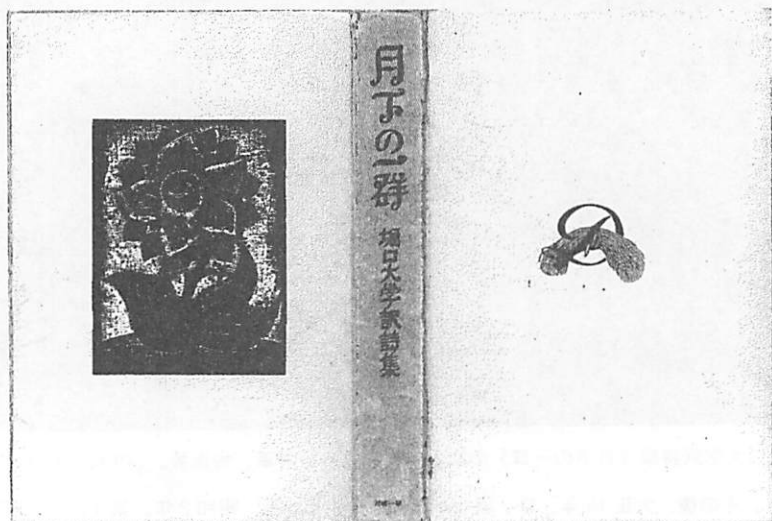
エピローグ



長谷川巳之吉書

この頃になると『陶説』に「陶器随想」「利休論」を連載するなど気ままに執筆をし、70歳を過ぎると、読書三昧、陶器を愛し、ときに碁を囲み、茶を嗜む隠遁生活を送るようになる。昭和48年7月22日、長岡市悠久山公園の「松岡譲文学碑」除幕式に列席後に咯血。翌23日には、前波善学を訪ね、24日鵜沼に戻るが病状は一進一退し、10月11日、遂に帰らぬ人となった。享年79歳であった。悠々自適の晩年の心情は遺墨「おもいで
のたのしさ」に託されているのである。
(すずき みおきち・おかだ てつあき)

引用文献：『第一書房 長谷川巳之吉』林達夫、福田清人、布川角左衛門 編著
日本エディタースクール出版部 昭和59年9月刊
『セルパン』創刊号復刻版 講談社 昭和57年5月刊
『美酒と革囊』長谷川郁夫著 河出書房新社 平成18年8月刊

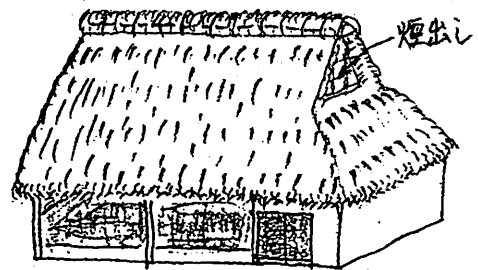


昭和11年刊 『月下の一群』普及版 装丁 版画家 長谷川 潔

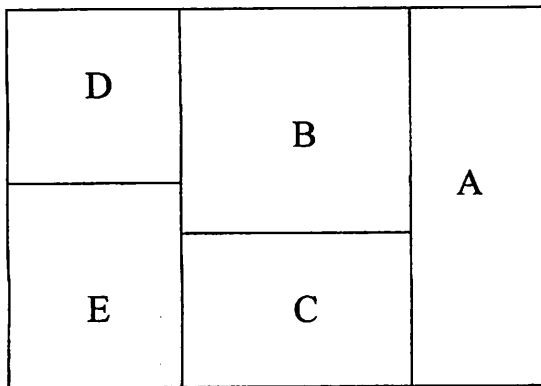
間取り

この民家の原型は、藤沢市教育委員会がまとめた調査報告書『藤沢の民家』による間取りのタイプに当てはめると、「喰違い四間取り型」であったと推定される。平塚の奥にあったと言うが、間取り的には、この調査内容と平塚の民家が著しく異なるとは考え難い。

屋根型式は片入母屋



喰違い四間取り型



- A: 土間
- B: ヒロマ、ザシキ
- C: カッテノマ
- D: オク、デイ
- E: ナンド、ヘヤ

巳之吉は A を玄関、書斎に

B、D はそのまま利用し、これに広縁を付け

C をトイレ、浴室など

E を厨房、女中部屋とし

これに茶室を付け加え、一階の間取りとしたものと思われる。

二階は B C D E の上部が蚕部屋であったのを、子供達の部屋にした。

玄関

門からアプローチを進み玄関に入る（現在は玄関の入り口位置は 90 度右手に移されている）と、^{あがりかまち}上 框部分の幅いっぱいの鉄錆色を帯びた鞍馬石の靴脱ぎ石があり、土間部分は黒色のセメントに那智黒石を埋めこんである。

側面に設置された下駄箱の上方は、小壁と緩やかな曲がりの自然木を^{ちような}手斧で仕上げた落とし掛けで装飾されている。

更に、正面には檼の一尺（約 30 センチメートル）角の柱が通され四隅は面取りされ（面取り柱）、鮑仕上げがなされている。

ザシキ（オクの手前の部屋）＝いわゆる応接間

一段高い 13.5 畳程の広さの部屋に入ると、右手壁面と左脇から始まる床の間との間の一畳程のスペースが設けられている。上方は 9 尺（約 2.7 メートル）程の高さのところに網代天井と、床の間上方を横切る落とし掛けとそれに接して小壁が設けてある。

歩を進めると、入り口部分とは対照的に 2 間（約 3.6 メートル）程の高さに天井があり、その高さの効果により、部屋はより広さを感じさせ、更に前庭側のガラス窓との間には 4 尺（約 1.2 メートル）幅の広縁もあり、相まって空間全体の広さと落ち着きが演出されている。

天井は太い自然木の梁が掛けられ、側壁同様に真壁方式で漆喰が塗られている。

右手側面は四隅が面取りされ、鉋仕上げされた檜の一尺（約 30 センチメートル）角の柱が組付けられ、真壁方式で塗込められている。床から鴨居の高さまでは飾り棚が設けられている。

入口の脇の床の間は床脇、付け書院等のある格調高い本床様式ではなく、床框を用いなくて地板の木口を見せ、その下に地板と同材の蹴込み板をはめこんだ 1.5 間（約 2.7 メートル）幅の蹴込み床としている。

床柱は磨き丸太であり、床板は一枚板ではないが、移築前の民家の材料が使われ、数枚の板が千切り栓で結合されている。それ故に今もって隙間無く平滑な面を保っている。

床の間に向かって落としがけを見ると、緩やかな弧を描いた自然木を手斧で仕上げたものが、床の間の端から入口の端までの 2.5 間（約 4.5 メートル）に渡って掛けられている。

広縁との間には、部屋幅いっぱいに 4 枚の明り障子があり、鴨居の上部には、同様の明り障子を建て込んだ欄間がある。

隣の居間との間は襖で仕切られ、上部の欄間には、燻された割り竹を隙間無く打ち並べた、木賊張りがされている。

広縁

応接間と居間の前庭側は、4 尺（約 1.2 メートル）幅の板張りの広縁が取付いている。

桁材は広縁の端から端まで 5 間（約 8 メートル）にわたり、元末が殆ど同じ太さの良質な磨き丸太が使われている。

外との仕切り窓上部には、透明ガラスの欄間が設けられ、明り取りの役目をし

ている。

オク（デイとも呼ぶ、床の間や仏壇を持つ）=居間として使用

広さとしては、10 帖の畳敷きである。

この部屋にも一間の床の間があり、隣接して 3 尺（約 90 センチメートル）幅の仏壇スペースがある。

側面はザシキ同様に真壁方式で飾り棚があるが、柱は通常の角柱である。

天井はザシキと異なり、桎目板を張った棹縁天井^{さおがちてんじょう}で、高さは 1.5 間（約 2.7 メートル）で当時の一般的な高さである

広縁との間には、ザシキとは異なり雪見障子があり、鴨居の上部には、ザシキと同様の明り障子を建て込んだ欄間がある。

天井の方式と長押が設けられていること、雪見障子等から推定するとこの部屋は居間としてつくられたものであると思われる。

二階

移築前の農家の養蚕部屋を部屋にしているためか、天井は低めであり、2 部屋を設けている。

床下

広縁の下基礎部分をみると、移築前の民家にあったと思われる自然石の置き石タイプの基礎ではなく、布基礎と上下 2 本重ねた土台がめぐらされている。

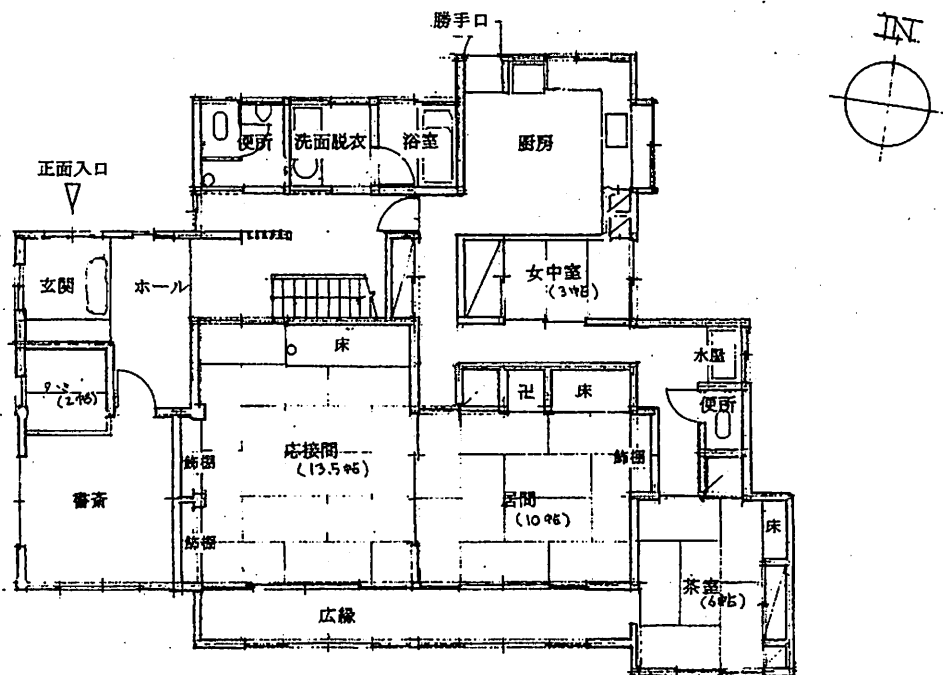
古民家を移築したことから、長谷川巳之吉の家への拘りは類推できるのであるが、更に現存しない鵜沼に建てた他の建物も、見たかったという好奇心にかられるのである。

終わりに当たり、今回の取材に協力していただいた関係者の方々には、紙面を借りて感謝致します。
(おかだ てつあき、 さとう ひろし)

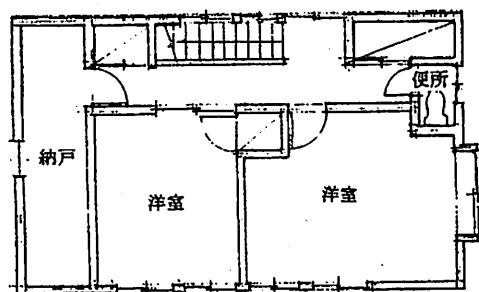
参考文献 『藤沢の民家』藤沢市教育委員会

『京の町家』株式会社淡交社

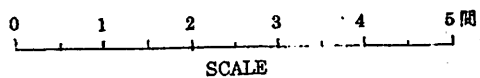
『第一書房 長谷川巳之吉』日本エディタースクール出版部



旧長谷川邸 1 階平面図



2 階平面図

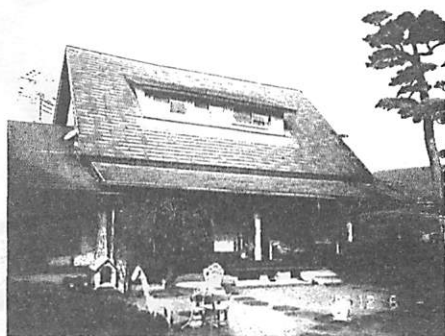


注：S 様からの聞き取りにより当時の間取りを復元したものです。

玄関側外観（尖った三角形の切妻屋根）



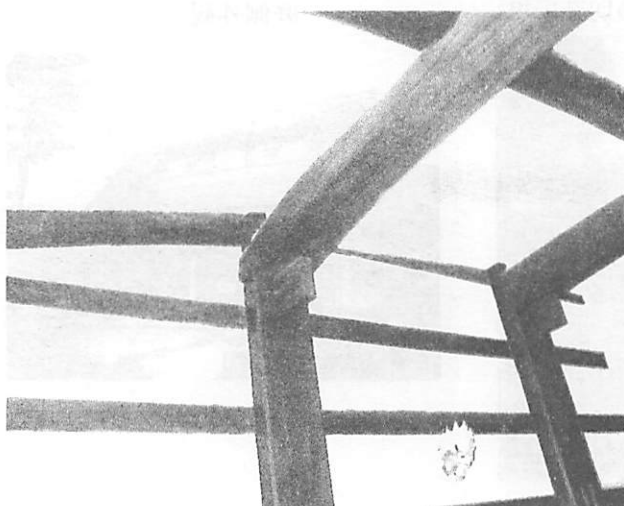
庭側外観



応接間：天井周り
（下の写真の上方）



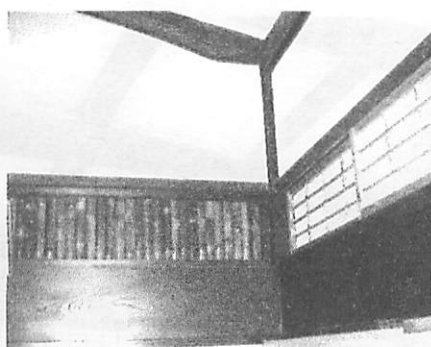
応接間：入口側より
広縁側を撮る



ザシキ天井の梁と
右手壁面の木組み

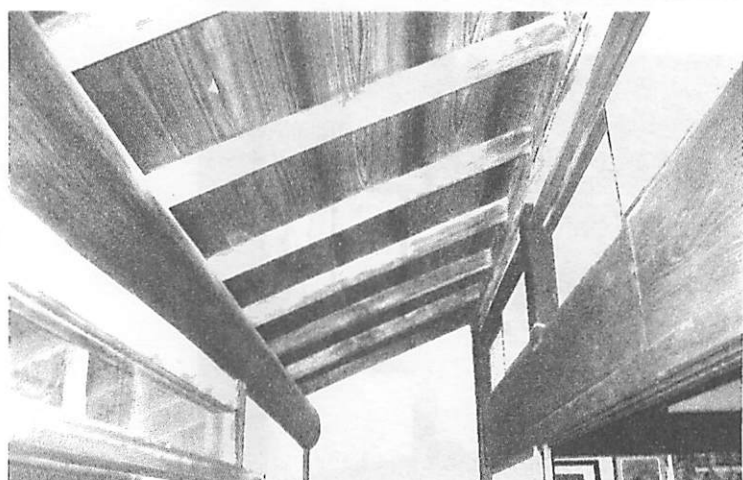


蹴込み床と千切り栓



木賊張りの欄間

広縁の桁材

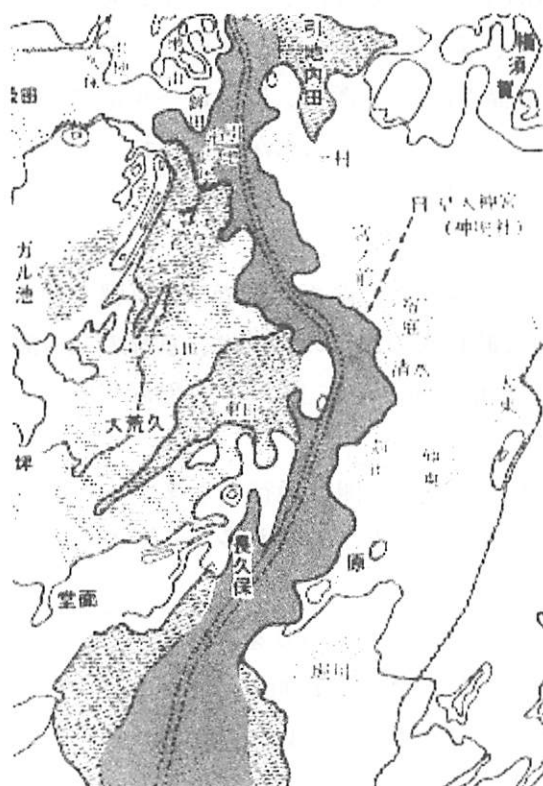


— 鵠沼という地名を考える —

会員 小林政夫

地名の由来について

鶴沼という地名は、全国で一箇所の貴重な地名で、地名関係の書物では難読地



鵜沼北部の平安末期の地形

名の一つとして必ず取り上げられている。「鵠沼」という地名の由来は、この地にあった沼に白鳥が飛来していたことに拠ると伝えられている。

地名の起こりは古く、平安時代の1145年に書かれた『天養記』に鵜沼郷の名が見えている。文献上鵜沼の地名が現れるのは、永正十五年(1518)の『道者日記』に「くくいのみ」と書かれ、天保十二年(1841)『新編相模国風土記稿』には、久々比奴末〔くくひぬま〕と表されている。

この記録から、くくひぬま → くぐいぬま → くげぬま と変化した事がわかる。

鵠の字は、くぐい（くぐひ）と読まれ、白鳥の古名で、別に「こひ」「こ

ふ、「くび」とも読み白鳥の鳴声によるものと言われている。

鵠の字を「くげ」と読ませるのは藤沢のみで、鵠の字を使った地名は、徳島県阿南市に 鵠（くぐい）鵠川（くぐいがわ）の地名があり、茨城県 坂東市に 鵠戸（くぐいど）の地名が見られるだけである。【ただし、国土地理院発行の2万5千分の1の地形図に記載されている地名の中で】

白鳥の飛来が地名として定着するには

白鳥の毎年の飛来と、かなりの固体数の定着が必要であり、鵠沼の住人や周辺

の集落の人々の見聞が無ければならない。

白鳥が自然の状態で（現在では、餌付けにより飛来の定着を図っている所が多い）定着するには、

1. 適当な餌場・^{ねぐら} 埒があるか……埒としての水面は、最低でも岸から 100 m は必要。

池・沼の中に白鳥の好む水草があること。付近の水田などの昼間の餌場があること。これについては、鵠沼に適地あり、上村橋付近から長久保公園付近までの低湿地・はす池付近の低湿地があり、清水には湧水があり早くから水田が開けていたので条件はよい。その上、万福寺には、「源海、鵠ノ遊ヘル沼地ノ一芳ヲ埋メテ宇ヲ創立シ鵠沼山万福寺ト号ス」という伝承が伝えられている。しかし、ほかに白鳥に関する伝承は鵠沼には無い。

2. 白鳥の越冬に適した気候であること……現在は、関東地方では東京都・神奈川県に飛来地は無い。地名の生まれた平安時代末の鵠沼の気候は、京都の桜の開花時期の記録や諏訪湖の結氷の記録から類推すると現在より 2℃程低かったらしいので、気象条件としては十分。

※ 万福寺近くには、皇大神宮があり古くから道が開け通行者も多かったし、鵠沼の集落の昔の中心地であった。白鳥を眺めた人々も多かったことと思われる。

現在、私たちが接している鵠沼の地名は、広域的な広がりを見せている。人口増や行政上の都合などから、地名が拡張化的に面的に広範囲を示す地名になっている昨今、地名の起こりとなった沼を特定することは詳しい伝承が無ければ困難である。

※ 白鳥の飛来はなかったのではないかという論（○印の項目）もある。

○当時の神奈川県内にも、白鳥の飛来の適地としての沼地は沢山あったのに、鵠沼だけになぜ飛来があつたのか？

（昔の白鳥の飛来地を調べると、ある一箇所に集中する傾向がある。鵠沼以外に固定した飛来地が無くても不思議ではない。）

○伝承がないのはなぜか？

（万福寺建立時の伝承以外に見つからない。また、右岸の羽鳥地区にも伝承

は無い様である。これが一番の弱点)

○「こうのとりの」と見間違えてはいないか。

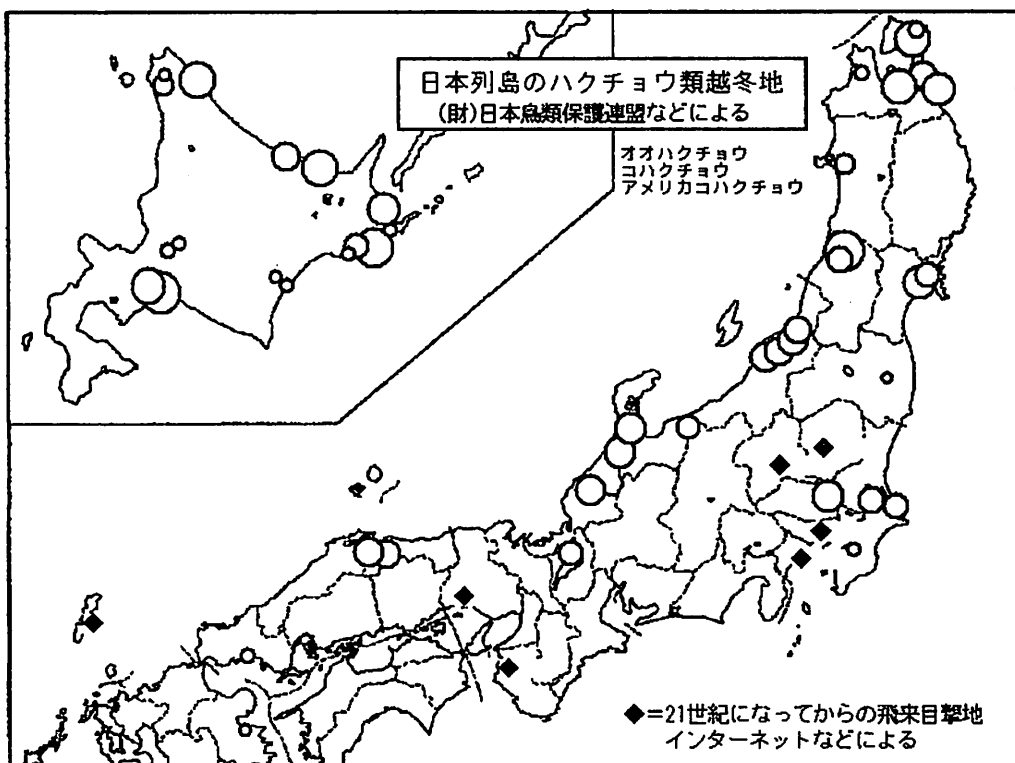
※ 結論として、白鳥の飛来があったかどうかは不明。しかし、鵠沼地名の発生当時に白鳥の降り立つ沼があったことの否定も出来ない。

参考

くく（鵠・久久・久々の字が当てられている）地名の語源について

『古代地名語源辞典』『地名用語語源辞典』の見解では

「くく」（鵠・芥・久久・久具・求々・十八 などの漢字が当てられる）は、動詞クグルの語幹で、砂丘、砂地、など水持ちの悪い地、川が伏流する地などのこと。
(こばやし まさお)



参考図 作図＝渡部 瞭

全国に鵠を追う

——クグイ・クグ地名分布とその特色——

渡部 瞭（会員）

はじめに 先日、の新年会で、小林政夫会員から「渡部さん、これ面白いですよ。使ってみてください。」と、1枚のCD-ROMを手渡された。『地図で見る 日本地名索引』という（アポック社（鎌倉市大船）の製品で、国土地理院の1:25,000地形図に掲載される地名が、その位置（経緯度）やふりがなを含めて検索できるものである。現行の地形図に基づいているため、消えた地名（例：砥上ヶ原）や最近の大型合併で生まれた市（例：南アルプス市）を検索することはできないし、ごく狭い範囲の、地形図に載せられない地名（例：鵠沼花沢町）は省略されている。

早速これを使って、以前から気になっていた「鵠」のつく地名がどこにあるのかを探してみることにした。

鵠とは 鵠の意味については、今号の小林会員の文にも詳説されているし、以前、『鵠沼』第12号で故伊藤節堂会員が『鵠沼の「クグヒ」』と題するかなり詳細な考察を発表しておられる。伊藤会員はこの中で「鵠のつく地名」として①茨城県の「^{くぐいど}鵠戸」「^{くぐいど}鵠戸沼」、②埼玉県本庄市の「^{くぐい}久久宇」、③富山県新湊市の放生沢瀧近くの「^{くぐい}久久江」、「^{くぐい}新久久江」、「^{くぐい}久久湊」の3箇所を紹介されている。

鵠地名 『地図で見る 日本地名索引』を検索して得られた「鵠」のつく地名を表示してみよう。

ふりがな	漢字地名	県名	経度 緯度	掲載地形図名
くぐい	鵠	徳島	134° 37' E/33° 51' N	馬場／橘
くぐいがわ	鵠川	徳島	134° 37' E/33° 51' N	馬場／橘
くぐいど	鵠戸	茨城	139° 52' E/36° 02' N	水海道／宝珠花
くぐいどぬま	鵠戸沼	茨城	139° 52' E/36° 02' N	水海道
くげぬま	鵠沼	神奈川	139° 29' E/35° 19' N	江の島
※ 鵠沼海岸・本鵠沼などの住所表記も出てくるが、周知なので省略する。				
こうのしり	鵠ノ尻	石川	136° 46' E/37° 21' N	皆月
こうのす	鵠ノ巣	石川	136° 57' E/37° 23' N	輪島
こうのもりやま	鵠ノ森山	岡山	133° 30' E/34° 46' N	高梁

これ以外にインターネットで検索すると、京都市内に^{くぐいざか}鵠坂という地名もある。

これをご覧になって「たったこれっぽっちか。」と思われるのも「案外多いな。」と感じられるのも自由だが、鵠は鵠沼の専売特許ではないのである。しかし、これを「くげ」と読むのは鵠沼だけのようだ。「こく」とも読まない。「くぐい」か「こう」である。

クグイ地名 くぐいは鵠の漢字ばかりでなく「久々井」などと表記される場合もある。これにはいったいどんなものがあるだろうか。

ふりがな	漢字地名	県名	経度	緯度	掲載地形図名
くくい	久々井	岡山	134° 05' E/34° 35' N		西大寺
くくい	久々井	岡山	134° 11' E/34° 42' N		片上
くぐい	久々井	岡山	133° 39' E/34° 32' N		玉島
くぐい	久々井	岡山	134° 05' E/34° 34' N		犬島
くぐいさき	くぐい崎	宮城	141° 39' E/38° 51' N		唐桑
くくいたお	久々井峠	岡山	134° 11' E/34° 42' N		片上
くぐいたわ	クグイ峠	岡山	133° 46' E/34° 28' N		下津井
くぐいとうげ	久々井峠	岡山	134° 04' E/34° 35' N		西大寺町
くぐいとうげ	久々井峠	岡山	134° 11' E/34° 42' N		和気
くぐいとうげ	供御飯峠	京都	135° 41' E/35° 06' N		周山
くくいわん	久々井湾	岡山	134° 12' E/34° 42' N		片上

「久々井」は岡山県に集中していることが判る。「くくい」と読む場合と「くぐい」と読む場合とがあるが、近接して双方が見られることから、同一視してかまわないと判断したい。面白いのは京都府の「供御飯峠」である。なんだか曰くありげな表記だが、ハクチョウからの意味が漢字を当てはめるときに変化したとも考えられる（小狭間→伯母様などその例は多い）。

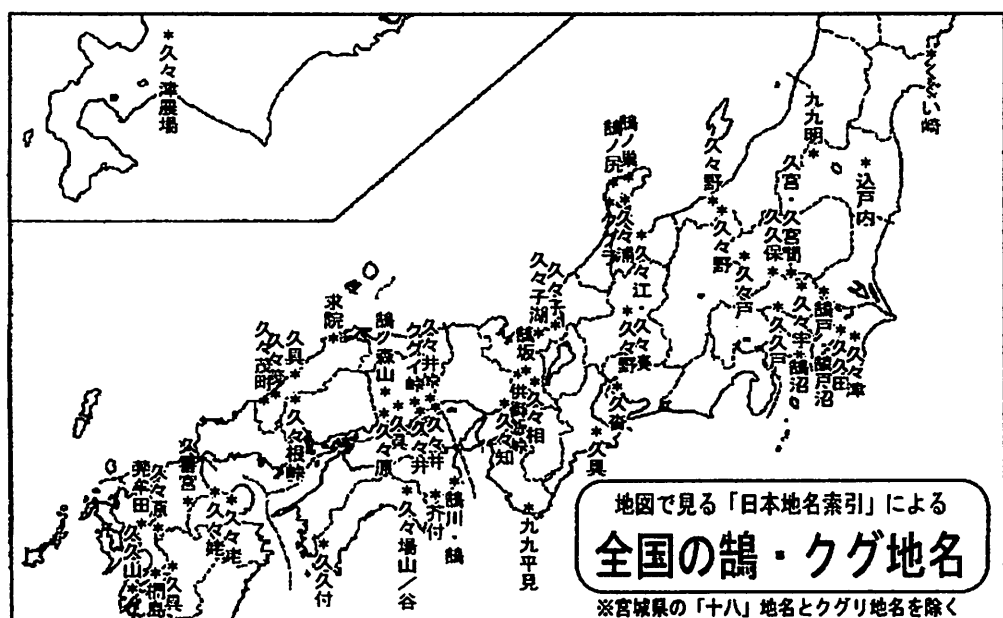
クグ地名 先述の伊藤節堂会員が紹介している地名に「久々^う宇」「久々^ま江」などがある。これらの場所では、地名の由来としてハクチョウとの関係を挙げているものが多い。

では、「クグ」のつく地名はどれぐらい見つかるかというと、先述の「鵠」「久々井」を含めて80ばかりが挙がってくる。これを例によって列記すると、それだけで2ページ以上を費やしてしまうので、県別に数をまとめてみた。但し、「クグリ」で始まる地名は除外した。ハクチョウとの関係がなさそうだからである。なお、このソフトでは検索できなかったが、岐阜県高山市に久々野町という町名があることがインターネット検索で判明した。

熊本県=3、佐賀県=1、福岡県=3、大分県=2、高知県=5、徳島県=4、広島県=2、島根県=3、鳥取県=1、岡山県=11、兵庫県=2、京都府=2、和歌山県=1、三重県=1、愛知県=1、岐阜県=5、福井県=2、石川県=2、富山県=2、新潟県=3、群馬県=3、埼玉県=2、千葉県=2、茨城県=2、福島県=3、宮城県=7、北海道=1

岡山県=11の大部分は先に紹介してある。北海道の1例は「久々津農場」というもので、経営者の姓か出身地から採ったのだろう。宮城県=7というのが目立つが、これは「十八成(鳴)」という難読地名が大部分である。種明かしをすると、いわゆる鳴き砂現象が見られる砂浜で、「クク」と鳴ることから9+9=18という判じ物だという。で、これはハクチョウ関係ではない。

あとは1~5箇所ずつで、25府県にわたる。これを地図上にプロットしてみたのが下図である。



これによると、宮城県から熊本県にわたって全国に分布するが、かなり粗密が見られる。その分布範囲は、飛鳥時代以前の初期大和朝廷の勢力範囲に一致する。すなわち、南方の熊襲、北方の蝦夷という勢力を征圧する以前の範囲である。

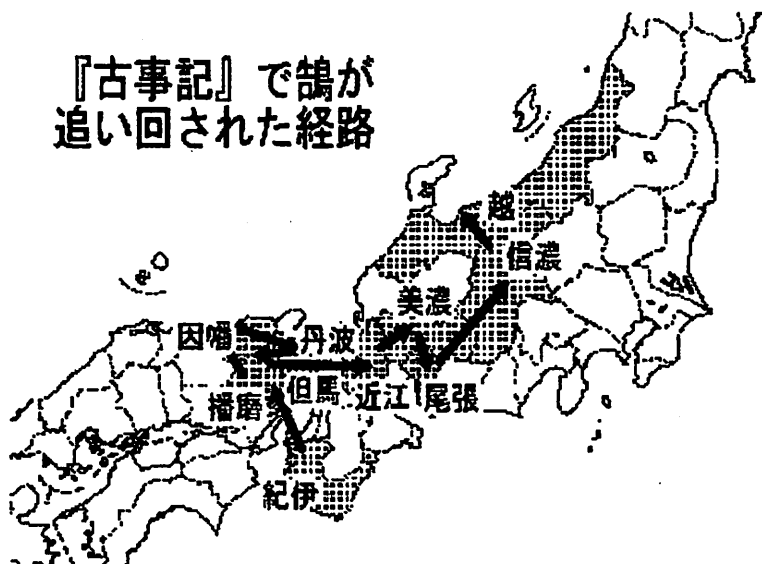
倭語における「くぐひ」とは、ハクチョウを意味し、漢字の同意語の「鵠」が充てられた。また、「くぐ」とは、カヤツリグサを指す場合があるので、クグのつく地名がすべてハクチョウと関係するわけではないが、クグ地名のみられる多くの場所で、地名の由来としてハクチョウとの関係が伝えられていることもまた事実なのである。他に埼玉県熊谷市の久下にも同様な由来が伝えられる。

記紀と鵠 「鵠」という漢字は、滅多に使われないが、日本に漢字が伝来し、一般的に用いられるようになった段階から既に使われている。

『日本書紀』によると、伝説上の11代垂仁天皇の子^{ほむつわけのみこ}菟津別皇子は父天皇に大変鍾愛されたが、長じてひげが胸先に達しても言葉を発することがなく、赤子のよう^{あめのゆかわたな}に泣いてばかりであった。皇子はある日、^{くひ}鵠が渡るさまを見て「是何物ぞ」と初めて言葉を発した。天皇は喜び、その鵠を捕まえることを天湯河板^{あめのみやつこ}挙（鳥取造の祖）に命じる。彼が出雲で捕まえて献上し、鵠を遊び相手にすると、菟津別命は言葉を発するようになった。ここに鳥取部^{とりべ}、鳥飼部^{とりかいべ}、菟津部^{ほむつべ}を設けたとある。

一方『古事記』では、菟津別皇子についてより詳しい伝承が述べられている。天皇は尾張の国の二股に分かれた杉で二股船を作り、それを運んできて、市師池、輕池に浮か

『古事記』で鵠が 追い回された経路



べて、皇子とともに戯れた。あるとき皇子は天を往く鵠を見て何かを言おうとしたので、天皇はそれを見て鵠を捕らえるように命じた。鵠は紀伊（和歌山県）、播磨（兵庫県）、因幡（鳥取県）、丹波（京都府/兵庫県）、但馬（兵庫県）、近江（滋賀県）、美濃（岐阜県）、尾張（愛知県）、信濃（長野県）、越（福井県/石川県/富山県/新潟県）を飛んだ末に捕らえられたとある。

これを地図上に表してみたのが上図である。そのルートの多くにクグ地名が見られることに注目したい。

おわりに 数年前、鳥取県の「米子水鳥公園」を訪れた。ここはコハクチョウの集団越冬地としては最南端という。訪れたのは初夏で、コハクチョウは繁殖地の北極海沿岸に帰っていたが、眼前に展開する湖を眺めながら、古墳時代の川袋一帯に見られたという「古鵠沼湖」ともいうべき湖の拡がりに思いを馳せた。鵠沼とは白鳥の湖だとの確信が得られる思いがしたのである。（わたなべ りょう）

床屋という場所



中島 誠之助

中島 誠之助

男は一生の間に何軒くらいの床屋に行くのか、考えてみたことがありますか。むろん、回数ではなくて店舗数のことです。意外にも少ないものなんですよ、これが。

ふりかえってみると、60代の後半に位置する人生を歩んでいる私は、いままでに世話になった床屋は、わずか4軒でしかない。乳児期とパンカラな蓬頭で過ごした青年期を除いて平均すれば、1軒が約15年のつきあいということになるが、それにしても少ない。

戦争中から終戦直後の幼年時代は、神奈川県湘南地方にいたものだから、松の疎林が点在する別荘族あいての床屋に通っていた。ここが小学校2年生まで。

戦争が終わってしばらく後、東京の赤坂に戻ってからは、都電通り（いまの六本木通り）にある同級生の父親の床屋になる。ここは小学校4年生のときから26歳で結婚するまでの間、月に1回は通ったことになる。

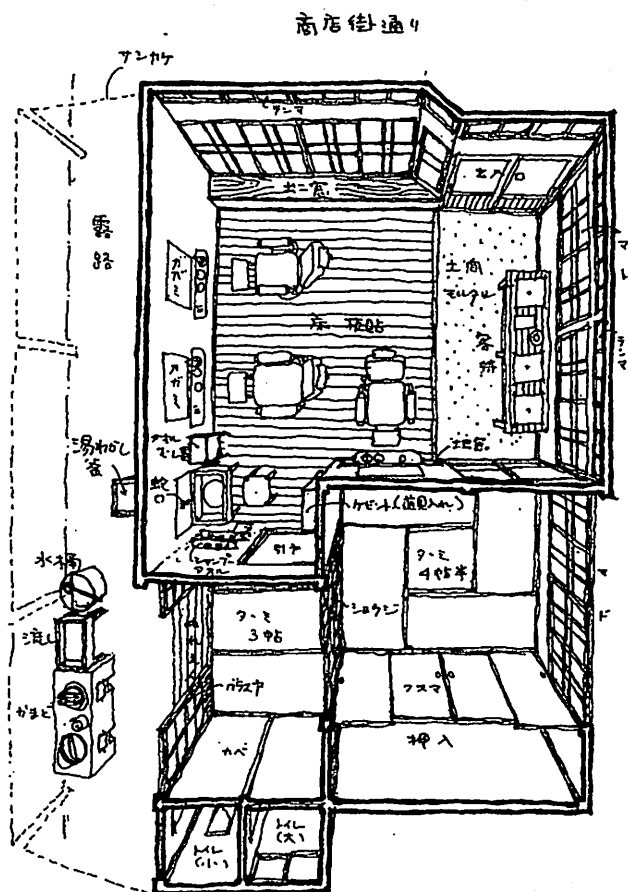
3軒目は、アパート住まいをしていた渋谷区広尾にほど近い西麻布の床屋で、その店は独立して商売をはじめた場所と、通りひとつへだてたご町内だった。

現在通っている床屋は、30代のおわりになって新店舗をかまえた青山の骨董通りにある。ここが一番つきあいが長く、かれこれ30年になろうとしている。

床屋というものは一度きめたら習性になって、そう簡単に代えられないのだ。そして床屋という商売は、町の要になっていて不変不動の店舗なのだ。

このあいだ60年ぶりに、幼年時代を過ごした湘南の鵠沼海岸を訪れた。

すっかり様変わりした商店街の中ほどに、なんと床屋だけが戦前の姿のままに営業しているではないか。思わずドアを開けて待合室の椅子に座り込み、子供のときしたように、首をあおむけにして天井板を眺めてみた。そして60年なんて、ほんの一瞬でしかないことに気が付いたのだ。（なかじま せいのすけ）



筆者が通った頃の鵜沼の床屋の様子
(会誌『鵜沼』84号「小林理髪店」より)

筆者紹介：古美術鑑定家、エッセイスト。古伊万里を世に広める。1979年「南青山骨董通り」を作詞、青山「骨董通り」の由来となる。TV「開運！なんでも鑑定団」の常連、確かな鑑定眼と歯切れのよいユーモアあるトークで有名。「いい仕事してますネエ」の名文句で「96年度ゆうもあ大賞」を受賞。著書に『古伊万里染付入門』『骨董屋からくさ主人』『目利の利目』『体験的骨董用語録』『ニセモノ師たち』『ホンモノの人生』など多数がある。1938年、東京生まれ。幼児期から鵜沼海岸に居住し、藤沢市立第三国民学校（今の鵜小）に入学、3年の途中で新設の鵜洋に転校、同学年半ばで東京に戻った。有田会長はその同級生。

編集部註：本文は有田会長の求めに応じ筆者が快くご提供下さったものです。

鵠沼伏見稲荷神社の創建について

鵠沼伏見稲荷神社宮司 田村 進

昨年の9月12日に神社参集所に於きまして、「鵠沼を語る会」の例会が開催され、神社の歴史について若干お話をさせていただきましたが、今回、有田会長より原稿を依頼されましたので、改めて神社創建当時の状況を記してみたいと思います。当社は昭和18年5月12日にこの鵠沼の地に創建されましたが、これに先だち昭和11年に京都伏見稲荷大社付属稲荷講社鵠沼支部（研修所）が、神社の斜め前（現在の鵠沼海岸5丁目13番28号）に建設されました。この建設に関しましては、当時の神社界の重鎮でありました高山 昇翁の存在を抜きにしては語れませんので、翁の略歴に簡単に触れさせていただきます。

高山 昇翁は元治元年（1864年）に群馬県の社家に生まれ、国学を修めて神社界に入り、静岡の浅間神社、宮城の志波彦・鹽竈神社、広島いつくしまの厳島神社の宮司を歴任し、大正13年より昭和11年まで伏見稲荷大社宮司を勤められました。昭和4年東京保谷ほうや（現西東京）市に関東に於ける稲荷大社の総鎮守として東伏見稲荷神社の創建に尽力され、昭和11年にこの鵠沼海岸に禊みそぎを含めた研修の場として、伏見稲荷大社付属の研修所を建てられました。以来この道場には、戦前・戦中・戦後を通じて全国各地より多くの神職が修行に来られたと聞いております。

その後7年後に当社が創建される訳ですが、このあたりの経緯につきましては定かなことは分かりませんが、当時の鵠沼海岸に於いては、町内会もいくつかに分かれており、お祭りも各町内毎に行なっていたようですし、祭典等には江島神社や皇大神宮の神職さんがご奉仕をされていたようです。

そのような状況の中で、鵠沼海岸の象徴として、この地域の守護神として、氏神・産土神社うぶすなを創建しようと言う機運が高まってきたのは自然の成り行きかと考えます。

そして、伏見稲荷大社付属の研修所も近くにあり、高山 昇翁も健在であることから、当時の地元有力者達も庶民に一番親しまれているお稲荷さんの勧請を決められたのではないかと思います。

また、境内地の設定につきましては、昭和16年1月14日付にて神奈川県神奈川県の許可を受け、藤沢市鵠沼高根5156番（約1,000坪）に設定されました。氏子区域につ

いては、鵜沼南海岸400戸、鵜沼西海岸350戸、鵜沼堀川170戸となっており、南海岸会長正田盛雄氏、西海岸会長加藤徳太郎氏、堀川会長岡山敏太郎氏の署名捺印にて承認されています。又、宮司として（当時は社掌と称す）関根公彦氏（皇大神宮社掌）、総代として作田高太郎氏、西村文利氏、加藤徳太郎氏、有田金八氏、中野一郎氏、関根靖浩氏、一木恒彦氏が就任され創建に向け準備を進めたものと思われます。

そして、昭和18年5月12日御鎮座当日を迎えることに成る訳ですが、4月30日に藤澤警察署長に提出された、神社新築落成鎮座祭執行届によりますと、

記

1、日時 来ル5月12日

(イ) 午前8時44分 ^{みたましろ}御霊代 藤澤駅御着

(備考) 京都伏見ノ官幣大社稻荷神社ノ御分霊ヲ勧請シ鎮祭

(ロ) 藤澤駅長室ニ於テ御小憩（此ノ間ニ供奉ノ行列整備）

(ハ) 午前9時30分 藤澤駅頭發御

駅前ヨリ日之出町ニ折レ橋通、高瀬通、宮崎通、高松通、熊倉通、西海岸ヲ經テ社頭着御

(ニ) 午前10時30分 鎮座祭執行

(ホ) 午前11時30分 祝賀式

(ヘ) 正午 ^{なおらい}直會

2、行列次第

先導（総代）一鉄杖（世話人）一^{おおめさ}大麻（神職）一社名旗一前驅（総代・世話人）一赤旗・白旗（世話人）一童女一眞榊（世話人）一伶人一^{はらえぬし}祓主一御霊代一齋主一稚児一講社本部顧問一後驅（総代・世話人）一講員一一般供奉者

3、式典参列者

神社ヨリ案内状ヲ發スル者 500名

と当時の写真(次頁)にもありますように約1時間余りをかけて藤沢駅より現在の鎮座地まで長い行列にて渡御した事、また盛大に祝賀会が催されたことがわかります。これを見ても、当時の人達がいかに氏神様の創建を期待し歓迎していたかを伺い知ることができるかと思えます。

ところで、神奈川県に当時提出された明細帳訂正願によりますと、鵜沼字中井（現在の本鵜沼5丁目2-25付近）の一祠を移転新築すとありますので、確かに移

御鎮座祭行列の先頭 熊倉通り行進中

昭和一八年五月一二日



新装なりし稲荷神社へ 御霊代御着き

昭和一八年五月一二日



転という形をとったものと思われませんが、当時の戦時中という世相を考えますに全く新たに神社を創建できる状況ではなかったので、移転という形をとって、伏見稲荷大社の御分霊を勧請し、この神社が創建されたと考えるのが妥当ではないかと思ひます。

以上、簡単ではありますが創建当時の状況について書かせていただきました。

氏子崇敬者多くのご参拝をいただきながら、神社は今年創建以来満64年目を迎えました。改めて感じますことは創建当時より今日まで、神社に関った全ての人の並々ならぬ努力と崇敬の念が、今日の神社の隆昌を盛り立てていることに感謝申し上げますと共に皆様の益々のご繁栄とご健勝を祈念申し上げます。

(たむら すすむ)

東京タワーの設計者

ない　とう　た　ちゅう
内藤多仲と鵜沼

岡田 哲明（会員）

はじめに

ある事柄を調べているうちに、ヒョウタンからコマというか目的外の新事実が明らかになるということがままあるが、今回の事例もその一例である。

前号『鵜沼』93号に有田裕一、佐藤和子両会員が発表された「芥川龍之介の短篇『悠々荘』は何处？」は長年お二人が課題として研究された成果の発表であった。とくに龍之介の姪である葛巻佐登子さんの証言を当初は最有力情報と位置付け、その場所の土地謄本まで入手して研究された。結論は別の場所が推定される訳だが、その土地謄本からコマが出たのだ。地震国日本の耐震建築構造力学を世界で初めて体系づけた工学博士、内藤多仲が鵜沼に別荘を持っていた事実が判明したのである。

その土地謄本の地番は鵜沼字下岡 6695 番地の 1、所在地は小田急鵜沼海岸駅から江ノ島寄りの踏切を渡って北へ学園通りを 200 メートルほど行ったところ、今の住居表示でいえば鵜沼松が岡 3-18-21 である。当初の地目は山林、その後昭和 4 年宅地に変更されている。所有者は明治 22 年 10 月 15 日付、千葉県東葛飾郡二川村の上原某に始まり、現在の M 氏までに 13 人名義が変わっている。M 氏の直前の所有者つまり 12 人目の名義人が内藤多仲（住所：東京市牛込区若松町 76 番地）で昭和 5 年 7 月から昭和 15 年 3 月まで 10 年間、所有していた。

なぜ鵜沼に？

内藤多仲は昭和 7 年に長女を、その数年後に長男をともに結核で亡くしている。

鵜沼の土地を入手したのは病弱な子供たちの療養が主な目的ではなかったかと想像される。

筆者はたまたま多仲氏の甥にあたる内藤正史氏とかつて職場が一緒だったので昔の事を訊ねてみた。子供のころ、その鵜沼の別荘には毎夏行き、従兄弟たちと海水浴、江ノ島や鎌倉へ遊びに行った事は覚えているが、駅からどのようにして行ったか、どんな別荘だったか建物や庭の様子などはまるで覚えていないとの事であった。彼はたしか昭和 6 年か 7 年の生まれだから、せいぜい 7、8 歳までの

記憶であるから無理もない。

従兄弟に当たる多仲氏の末子、多四郎氏にも当時の別荘地の様子や建物の写真などがないかを当たって貰ったが何も残っていないとのご返事であったという。

誠に残念である。早稲田の建築科の学生が夏休みに遊びに来る事などもあったのでは、とも考えられ、ヒョットとして大学の資料などのなかに別荘をバックに先生と学生たちが写っている写真等があるかもしれないなどと想像するのである。

内藤多仲のプロフィール

内藤多仲は 1886(明治 19)年 6 月 12 日山梨県中巨摩郡榑村曲輪田 2860 番地（現：南アルプス市櫛形）に中野屋という酒造業をいとなむ内藤小四郎の長男として生まれた。甲府中学を卒業、明治 37 年 9 月第一高等学校入学、明治 40 年 9 月東京帝国大学造船学科に入学、最初の講義で卒業後の就職の困難を言われて 10 日後に建築学科に転じたという。当時、実家が火災に遭い、一家を支えなければという長男としての自覚から転科したのだという。



内藤 多仲

明治 43 年卒業と同時に早稲田大学講師となる。明治 45 年、東大大学院修了と同時に早稲田大学教授となり、大正 6 年、1 年間アメリカ留学、同 11 年「架構建築耐震構造論」を発表、同 12 年欧米視察、同 13 年「架構建築耐震構造論」で工学博士の学位を得た。

終生、早稲田大学で教鞭をとったが、昭和 13 年には付属高等工学校校長、昭和 14 年専門部工科長、昭和 19 年理工学部長理工学研究所所長、昭和 29 年理事に就任。

昭和 32 年 定年退職。ただちに早稲田大学名誉教授となる。

昭和 33 年 紺綬褒章受章

昭和 34 年 紫綬褒章受章

昭和 35 年 学士院会員

昭和 37 年 文化功労者 NHK 放送文化賞受賞

昭和 38 年 早稲田大学名誉博士

昭和 39 年 勲 2 等旭日重光章受章

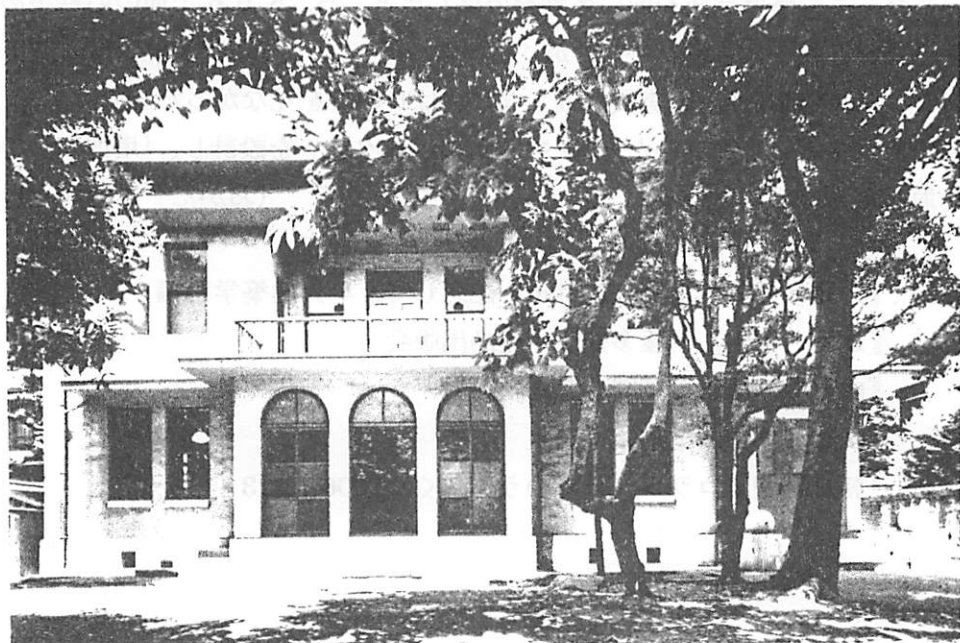
昭和 40 年 自伝「建築と人生」を鹿島出版から出す。

1970 (昭和 45) 年 8 月 25 日、84 歳の生涯を閉じた。多磨霊園にある墓石には彫刻家円鋸勝三による本を小脇に抱えた博士の胸像が飾られている。なお同じ胸像が郷里の楡形中学校の正門脇にも設置されている。

主な業績

大正 11 年、耐震構造理論を世界に先駆けて発表、その理論に基づいて設計した歌舞伎座や 7 階建ての日本興業銀行本店は竣工間もなく関東大震災に遭遇したがビクともせず、その理論の有効性、優秀性が高く評価される結果となった。

今日、耐震建築構造理論や耐震構造設計力学では日本が世界の最先端をいつているがその基礎を築いたのが内藤博士である。また大正 15 年に新宿区若松町に建てた自邸は 2 階建てコンクリート壁式構造（柱や梁を用いず縦横方向の壁をバランスよく配置して床や屋根を支える工法、戦後、公団住宅などに多く用いられた工法）の第 1 号である。



旧内藤多仲自邸（現：早稲田大学内藤博士記念館）

この自邸について内藤自身次のように述べている。

「関東震災後、耐震耐火を強調した手前、また佐野、内田両先生に倣って鉄筋コンクリートで一つ見本を作ろうと思ったのである。土地は岡田信一郎君の世話で西脇氏から譲り受け、設計は同級の木子七郎君にお願いし、今井兼次君の協力も得、構造は自分でやった。それで考えたのは住宅程度のものでは柱は邪魔で不用だから箱を作るように壁とスラブ（床）だけで十分だろう。このほうが工費も安く便利だからということで出来たのがこの家である。これが計らずも戦後の壁式工法の先駆第1号となったわけである」

内藤多仲はその生涯にわたり 500 を超える建築物の構造設計を担当したが、著名な物を挙げるならば早稲田大学大隈講堂、同文学部校舎、東京電灯千住火力発電所、NHK 大阪放送会館、明治生命本館、東京厚生年金病院、鶴見総持寺大祖堂など枚挙にいとまがない。

とくにテレビ本放送が開始された昭和 28 年、名古屋テレビ塔の設計を担当し、つづいて昭和 31 年、大阪通天閣、翌 32 年は別府タワー、札幌テレビ塔と次々に鉄骨のタワーを設計した。なかでも東京タワーはパリのエッフェル塔を抜く高さ 333 メートル、総工費 30 億円をかけて昭和 33 年に建てられ「戦後復興の象徴」といわれた。この塔は完成を前に名称を公募したところ、8 万 6 千通の応募があったそうだが、もっとも多かったのが「昭和塔」だった。「東京タワー」はベスト 10 にも入らない 223 通。審査員が推さなければ日の目を見なかったという。

その後も博多ポートタワーなど延べ 30 もの鉄骨タワーを設計し、「塔博士」の異名を取ったといわれている。（おかだ てつあき）

参考資料：『内藤多仲先生の御生誕百年を記念して』早大建築学科編

『建築と人生』内藤多仲著 鹿島出版会

『内藤多仲博士の業績』鹿島出版会

『内藤多仲作品譜』城南出版

『朝日新聞』コラム「今日のうんちく」2006.12.23



大給子爵家ゝぼればなし

渡部 瞭(会員)

家紋＝丸に釘抜

はじめに 我が国初の別荘分譲地である鵜沼海岸別荘地開発について調べてみると、大給子爵家^{おぎゅう}が所有した25万坪ともいわれる広大な砂原からそれは出発したと出てくる。この土地がなかったら、鵜沼海岸別荘地はなかった。

会誌『鵜沼』で大給家について触れた文は、12, 56, 62, 73, 74, 75, 76, 77, 80, 88, 90の各号に見られる。それだけ多くの諸先輩が大給家に関心を持ち、調査・研究をしてこられたのである。にもかかわらず、大給家については謎に包まれていて、幾つかの点について明快な解答が得られていない。

まず、大給家という、それまで鵜沼にはほとんど関わりのなかった旧大名が、どういう理由で広大な旧鉄砲場の砂原を25万坪も入手したのか。

次に、それは有償だったのか、無償だったのか。有償だったとしたら、いくらぐらいだったのか。無償だとしたら、いかなる経緯によるものか。

また、入手した時点はいつ頃か。

さらに、大給家お抱え大工の棟梁木下利吉・利次父子はともかく、伊東将行なる人物がどのような経緯で大給家所有地の別荘地分譲の中心人物になったのか。

そして、その伊東将行の顕彰碑ともいえる「鵜沼海岸別荘地開発記念碑」が、大給家ゆかりの賀来神社^{かく}境内に建てられているにもかかわらず、碑文に大給家について全く記されていないのは何故か。

などの諸点である。

大給家の土地入手 この問題に関して、かなり正面から取り組んでいるのが、会誌『鵜沼』73号所載の牧田知子氏による「近代住空間の形成— 鵜沼を例とする別荘型住空間 —」という論文である。氏は日本建築学会の正会員で、当該論文は1995年8月に学会での学術講演に発表した論文の概要を故高木和男会員が提供したものである。

これによれば、大給家は鉄砲訓練の責任者であったため鵜沼との関係が生じ、まず3,000坪程（現在の藤が谷3丁目辺り）を世襲財産として入手した。次に維新後は宮内省に勤務したことから、明治20年代に御用邸誘致の構想のもと新たに

鶴沼の土地を購入し、御用邸の候補地として別荘全体の水準を上げるため当時の名士、財閥に買うよう奨めた。ところが御用邸は土方伯爵^{ひじかた}の推奨により明治27年、葉山に決定したため大給子爵の構想は中断し、土地を開発・分譲して資金を回収する必要が生じた。これ以降大給子爵による土地分譲は本格化した。また、伊東将行との関係については、どちらも旧幕勢力であることから師弟関係にも似たつながりが生じたのであろうと推論している。

他の諸先輩の文でも、これを否定する、あるいは補足する記述は余り見られない。いずれも大同小異である。

ただ、牧田知子氏の記述に（現在の藤が谷3丁目辺り）とあるのは、有田裕一会長により鶴沼松が岡4丁目とすべきであることが判明した。

一方、藤沢市史では、鶴沼海岸別荘地開発記念碑の記述を根拠にしているため、当然のことながら大給家については実に素っ気ない。

なお同碑文にはないが、「横浜貿易新報」（大正3・4・1）によると、地主の大給子爵家が東屋旅館付近の土地について貸与・分譲を実施したことが、「鶴沼の大発展」を促したといわれ、また同月26日の記事は、当時、久松子爵家が同海岸に数千坪の土地を購入して、伊東将行の監督下に別荘の工事中であったことを報道している。いずれも華族による土地の開発が、明治20年前後から、北海道などを中心とするかれらの全国的な地主化の進展に対応して、伊東将行の事業の周辺で進行していた点で興味深い。（藤沢市史第七巻535頁）

この記述では、かろうじて大給家が地主であることに触れているものの、その土地を購入した久松子爵家と並列して取り扱われているが、開発の主人公は、あくまでも伊東将行なのである。

大給子爵家の出自 そもそも大給子爵家とはいかなる家柄なのだろうか。

この問題に関しては、有田裕一会長の詳細な解説が会誌『鶴沼』第88号に掲載されているので参照されたい。

同家は江戸時代には松平姓を名乗っており、大分県大分市の府内城の城主であった。幕末の頃、寺社奉行から若年寄に昇格したが、1868（慶応4）年2月6日に府内藩主松平近説^{ちかよし}は、願って若年寄を免ぜられ、京都へ上り、「大給」に復する旨を京都の弁事御伝達所に届け出ている。

松平家は室町時代には三河の豪族であったが、一族繁栄のために分家に支城を管理させ、宗家は、家康の時代に徳川姓を名乗ることになる。

この分家は18系統あったといわれる。経歴の明確なものが14系統あって、これを十四松平、諸書によって異動のある松平家4家を含めたものを十八松平という。

すなわち松平家とは徳川將軍家の親類筋ということになるが、実は論功行賞的に松平姓を与えた場合が他にも多く、いわば十八松平は“由緒正しき松平”ということになろう。原則的に譜代大名になるが、旗本だったりする家もある。

大給家とは大給松平家のことで、松平宗家の4代目の親忠の次男の乗元を祖とする。乗元が東加茂郡の大給(荻生とも。現愛知県豊田市)地方の主だったため、この地名を採った。早くから家康に仕えて信任が篤かった。以後も本家、一族で大名や高級旗本になった者も多い。歴代の老中も5人が務めている。幕末まで続いた譜代大名は次の4系統で、版籍奉還後いずれも子爵に列した。

西尾大給松平家 60,000石 三河国大給→出羽国山形藩→三河国西尾藩

岩村大給松平家 30,000石 美濃国岩村藩

龍岡大給松平家 16,000石 三河・信濃国奥殿藩→信濃国田野口(龍岡)藩

府内大給松平家 21,200石 三河国西尾藩→丹波国亀山藩→豊後国府内藩

府内藩を最初に統治したのは、竹中家で、二代続き、その後を日根野家の吉明が統治した。彼には子がなかったので、幕府管理の後、松平(大給)分家の成重の子忠昭が1658(万治元)年に豊後高松より大分県大分市の豊後府内城に入り、以来幕末までを②近陳・③近禎・④近貞・⑤近形・⑥近儔・⑦近義・⑧近訓・⑨近信・⑩近説と、松平(大給)家が10代継ぐことになる。竹中・日根野両家はいずれも外様大名で20,000石だったが、松平(大給)家は譜代大名で22,200石だった。もっとも、二代近陳の時に弟に1,000石を分与し、以来21,200石となった。

府内城 豊後府内城は、安土桃山時代末期の慶長年間に福原直高によって築城され、大分城、荷揚城、白雉城とも呼ばれる。大分市の中心部荷揚町に位置し、北方に海を臨む典型的な平城である。直高は石田三成の妹婿で豊臣秀吉とも近く、石高は12万石であったため、府内城はその石高にふさわしい規模で築城されたという。江戸時代に入り、竹中家の手で天守閣が造営され、築城が完成した。

大給松平家が城主になったときには城はできあがっていたわけである。

1743(寛保3)年城下の下柳町から出火した大火事により天守閣以下ほとんどの建物が焼失した。以後これらの諸櫓は再建されず、天守閣を欠く城となった。

現在城趾は城址公園となっているが、濠の他、江戸時代から遺る建物は本丸の人質櫓と二の丸の宗門櫓のみで、多聞櫓門以下は1965(昭和40)年に再建された。

菩提寺 府内大給松平家は浄土宗信徒で、菩提寺は大分府内城の北西に隣接する浄安寺である。歴代藩主のうち、浄安寺に葬られたのは3人のみで、残り7人の墓は東京都文京区小石川の伝通院の塔頭見樹院にある。見樹院は1675(延宝3)年に大給忠昭が、父の見樹院殿霊位の追善供養のため、伝通院山内に大給松平成重を開基とし、諦蒼直絃上人を開山上人として迎え別院を建立、見樹院と称した。

ここに眠る7人は、参勤交代で江戸詰の時に亡くなったと思われる。七代近義は参勤交代途中で駿河の岡部で急死し、見樹院に葬られた。

府内藩江戸屋敷 昨年秋に刊行された芥川賞作家 辻原 登 の新作『夢からの手紙』(新潮社)には、府内藩江戸屋敷勘定方を務める片岡孝介なる人物が主人公として登場する。国許の大分に残した妻の便りから物語は展開する。

1687(貞享4)年以降、豊後府内藩の江戸屋敷は、江戸城の北東方向にあたる駿河台にあった。ここは現在の神田淡路町1丁目一帯で、地下鉄新御茶ノ水と小川町の間にあたり、5600坪というものであった。この広さは、周囲の大名屋敷の規模と石高と比較して破格のものだと判るだろう。善神王宮とあるのは賀来神社の基となった神社である(鵜沼賀来神社に善神王宮の石碑が祀られている)。



幕末、近世時代の江戸屋敷



現在の旧江戸屋敷付近

維新後の大給子爵家 松平改め大給近説は、版籍奉還後は府内藩知事に任命され、明治17年7月8日子爵に列せられたが、廃藩置県直前に東京移転を命じられ、廃藩とともに知事職も解任された。隠居の後1886(明治19)年没する。

近説の跡を継いだのは、八代藩主松平近訓の孫に当たる近道であった(九代近信・十代近説は共に養子)。大給家は1872(明治5)年、神田淡路町の本邸邸地を開



放し、本郷駒込千駄木坂下町の旗本小笠原順三郎邸跡に移る。現在の千駄木3丁目13番地あたりである。面白いのは、明治時代の地図(左)に水田から大給邸に至る細道が「大給坂」と名付けられていることである。この名は現在も残り、文京区教育委員会の解説板が立つ。文面は次の通り。

おぎゅう 大給坂

かつて、坂上に大給豊後守の屋敷があったことから、大給坂と名づけられた。

大給氏は、戦国時代に三河国(いまの愛知県)賀茂郡大給を本拠とした豪族で、後に徳川家康に仕え、明和元年(1764)、三河西尾に移封された一族である。

現在残っている大銀杏は、大給屋敷の中にあつたものである。この辺りの高台を、千駄木山といい、近くに住んだ夏目漱石は、次のようによんでいる。

“初冬や 竹きる山の なたの音”(漱石1867～1916)

文京区教育委員会 平成3年3月



大給坂

(急な坂で積雪時危険とか)

ここまで小文をお読みいただいた方はこの文面の誤りにお気づきだろう。

大給豊後守とは大名の称号であるが、大給家がここに屋敷を構えたのは明治になってからであり、歴代の豊後府内藩主大給松平家に豊後守を名乗ったものは見あたらないし、他の大給松平家にもなさそうだ(他の松平家には数人の豊後守がいる)。だからこの文面にある「大給豊後守」は「旧豊後府内藩主だった大給家」と訂正すべきである。また、大給氏に関する解説は松平家であることが抜けてお

り、後にもおかしい。第一坂の上に屋敷を構えた大給家の解説となっていない。

大給家と錦坊学校 1874(明治7)年、神田錦町にあった久松学校を猿楽町2丁目(現神保町1-30)に移転して錦坊学校を新築した時、近道は近隣に屋敷があった旧大名の華族と共に相当額の寄付をしている。この錦坊学校で漱石が学んだ。

錦坊学校は後に錦華尋常高等小学校と改名し、戦後は千代田区立錦華小学校として知られていたが、1993(平成5)年4月1日、学校設置条例の改正にともない、小川小学校・西神田小学校と合わせて千代田区立お茶の水小学校となった。

大給家と大分 大給家は大名道具を賀来神社に寄進し、今も大名行列に使用される。近道は1887(明治20)年に第二十三国立銀行(大分銀行の前身)の取締役に加わったり、近孝は大分で開かれた菓子博覧会の総裁を務めたり旧領地に貢献した。

大給家と黒田清輝 前ページの明治の地図からは外れるが、すぐ南側に^{だんござか}團子坂があり、大給家のある一帯も團子坂と呼ばれることがあったらしい。大給家は黒田清輝画伯(1866-1924)と親交があったようで、画伯の日記には1914(大正3)年夏に鎌倉で静養中の画伯を鶴沼から大給子爵が訪ねたことと、1917(大正6)年4月に画伯が美術学校から自動車で團子坂大給家へ行ったことが出てくる。

四月十九日 木 晴 少シク風アリ

午前十一時頃宮内省ヨリ襲爵被仰付ニツキ明二十日午前十時親族ノ内出頭ス可シトノ通知ヲ受ケタレバ電話ニテ大給子爵ニニム 午後一時ヨリ自動車ニテ外出 先ヅ美術學校ニ到リ校長ニ面會シ御前揮毫ノ事ヲ語り團子坂大給家ヘニハル 子爵モ夫人モ不在

四月二十日 金 曇

大給子爵代リテ辭令ヲ受ケ歸途入來交付セラル 午餐ノニ應ヲナス 近清君モ見ユ 大給子爵去リテ後島津邸ヘ赴キ長谷寺 筭邸ヘニル 板谷氏等ト島津邸ニ會合シ樂焼ニ關スル打合ヲナセリ ※筭邸^{あざぶこうがいちょう}=麻布筭町の黒田邸「襲爵被仰付」とは次のような事情と思われる。

黒田清輝は1866(慶応2)年6月29日、島津藩士黒田清兼の子として鹿児島に生まれたが、5歳の時、伯父黒田清綱の養嗣子となった。清綱は幕末国事に奔走、1868(明治元)年山陰道鎮撫総督府参謀、翌年、鹿児島藩参政を経て教部少輔、元老院議員などを歴任、1887(明治20)年5月24日子爵に列した。のち貴族院議員、

枢密院顧問官となり宮内省御用掛を兼ねる人物である。和歌をよくし、明治大正両天皇のお歌所の一人として活躍した。

清綱は1917(大正6)年3月23日他界し、勲一等旭日桐花大綬章を受けている。養嗣子の清輝はそれにより子爵を継ぐことになり、4月19日11時に宮内省から翌20日の午前10時に親族でもよいから出頭せよとの連絡を受けた。ところがあいにく誰も都合がつかず、代理を大給(おそらく近孝)子爵に頼んだわけである。大給子爵はこれを引き受け、代理として辞令を受け、その日のうちに届けた。清輝は謝礼として昼飯をご馳走したというわけだ。

こういうかなり無茶なことができたのは、清綱が宮内省に関係していたことその他に、牧田知子氏のいう「大給子爵は維新後は宮内省に勤務した」ことの裏付けになるのかも知れない。

この時、近清君という人物が同行している。黒田日記にはその前後に大給近清が黒田家を3回ほど訪れた記録もある。大給近清は、大正13年になって国民美術1巻9号に『黒田先生の嗜好』なる一文を寄せている。近道は1902(明治35)年に他界しているから、嗣子近孝の弟か子息と思われる。大給子爵家はその跡は近孝→近憲→近達^{ちかさと}と継いだ。すなわち、子爵家を継いだ人物に近清の名はない。

最後の大給子爵近達^{ちかさと}氏は文化人類学者。兵庫県にお住まいと聞く。

今も遺る芳林閣 千駄木には大給近孝子爵の寄付により、1926(大正15)年地元青年団のために文武道場として建てられた「芳林閣」という和風平屋建てが現存する。大給家から現在は財務省の管理となり、町会が賃貸費を払い、会合などに使用しているという。

銀杏の木のこと 当時の地番では駒込林町105番地にあった大給邸は、昭和に入って三木証券株式会社創業者の鈴木三樹之助に譲られた。その際大給家は、「何があっても銀杏の木だけは残して欲しい。」と伝えたという話が遺っている。

終戦直後の1945(昭和20)年9月下旬、5月25日の第二次東京大空襲で牛込区若宮町31の自宅が全焼、世田谷区烏山の借家に身を寄せていた娘の志げ子一家が実家に転がり込んできた。この志げ子の夫が、当時大蔵省主計局に勤務していた大平正芳(1910-1980)である。香川県出身の彼は、1952(昭和27)年の第25回総選挙で自由党公認候補として香川選挙区から立候補し、衆議院議員に初当選した。

1960(昭和35)年12月27日、義父鈴木三樹之助が75歳で死去。以来大平正芳がこ

の家の主となった。やがて彼は池田内閣の外相に就任したりする。

1966(昭和41)年11月5日、大平家は世田谷区玉川瀬田町873-2(現瀬田1-28-3)へ転居するのだが、銀杏の木立つ場所は文京区に寄付し、千駄木第二児童遊園として残った。そういうわけでこの公園の別名は“大平公園”。この銀杏を“大平いちょう”と呼ぶという。のち正芳は首相となり、二期目の途中で他界した。

2軒の大給子爵家 先に触れたように大給松平家は4系統あり、いずれも子爵となった。このうち2系統は幕末に官軍に恭順を示すためか松平姓を捨てて大給姓を名乗る。府内大給松平家の近説と龍岡大給松平家の乗謨である。

乗謨は、1863(文久3)年藩治を奥殿から信濃国佐久郡田野口(龍岡)に移した。この年大番頭より若年寄となり、翌々年陸軍奉行に転じ、幕府の兵制を改め、その翌年老中格に進み、陸軍総裁を兼ねた。牧田知子氏の指摘されている大給家は鉄砲訓練の責任者であったというのは、このことを誤解された可能性もある。

乗謨は改姓後大給 恒と改名し、西南戦争が起こると博愛社を創立、これが日本赤十字社に発展した。賞勲局総裁を務め、1896(明治29)年6月30日勲一等旭日大綬章を受賞した。さらに1907(明治40)年9月23日、伯に陞爵(功績により爵位がランクアップすること)している。こちらの方がずっと有名人だった。

大給 恒が伯爵となるまでは大給子爵家が2軒あったわけで、これがまたさまざまな誤解を呼ぶことになる。

全くの余談だが、東屋二代目女将長谷川多嘉の別れた夫、すなわち長谷川路可の実父である杉村清吉(1855-1916)は、『大給龜屋公傳』に「綬の織目に水紋を織り出したのは、杉村清吉氏の発明によるもので、わが国の勲章は大給恒・平田春行・杉村清吉の3人の合作ということになっている。」と出てくる。

おわりに このように、大給子爵家についてあれこれ調べてみたものの、冒頭に列挙したいくつかの疑問点に対する解答は、何一つ得られなかった。

牧田知子氏の指摘されている大給家は鉄砲訓練の責任者であったことも、維新後は宮内省に勤務したことも、明確な裏付けをとれなかった。ただ、松平近説が安政年間より洋式訓練を行い、農兵隊を編成するなど軍備充実に努めたとあるが、これは国許でのことであって、鶴沼の鉄砲場とは関係なさそうである。

筆者は大政奉還後、旧幕府領の処分を考えた明治新政府が、版籍奉還した旧大名に下げ渡したのではないかと睨んでいる。(わたなべ りょう)

遺言書

今井達夫

今日から一週間日に六十九回目の誕生日が来る。奇妙な感じである。去年の誕生日にいくらかふざけた心持で遺言書みたいなものを書いたが、そのなかでほんとの心持といえば死後戒名の必要なしという一條だけであつた。その心持は現在でも変りがなくて、より一層、真実性を増した心境である。私は私の姓名に一種の愛着を持っている。それは五十年にわたって日に馴れているからであろうか、数多い活字の氾濫のなかからその四字は素早く浮き出して来るのであるが、しかし、これは何も私だけのことではあるまい。五十年の歳月のあいだにどれだけの度数それは活字になったのか、数えておけばよかったなどとはいってみるだけのことでこれも感傷の一種にすぎないのはいうまでもない。但し、それ以前に私が使っていて同時にほかのひとによって書かれたり、たまに活字になったりしたのは私の戸籍上の姓名であり、現在それが私であるとみとめられているのは五十年ほど前に私が工夫した姓名、と云うて戸籍上のそれとは一字だけちがうのみである。

少々話が横道にそれくどくなつたが、五十年使い馴れた姓名に愛着をおぼえる理由にはいうまでもなくそれが若干の虚名とむすびついている虚栄心によるものと自省しなければならないが、それ以上に戒名というものが私とは全く無関係な親愛感をおぼえさせない空名にすぎないからである。ここまで書いて来てふと胸に浮かんで来たのはそう云いきれないものがあることに気づいたことだ。これは大変世俗的で、もうひとりの私は苦笑しているが、気づいたことだから書いておいたほうがいゝであろう。なぜ姓名にこだわり戒名不要を唱えるかといへば、それは自然と墓に関係して来る。墓など欲しくない、不要という心持の深い私であるが、強いてそれを強説しないのはめんどくさいからにすぎない。墓石は建っていないが両親の分骨の埋めてある墓地は藤沢赤門真徳寺境内の墓地に存在していて、私の死後はそこに墓石が建立される予想はくつがえすわけに行かない。とすれば、墓は不要だと強弁することで混乱を起こさせるのも私の趣味に合わない、死後のことまで指示するのは滑稽である。墓石は建ててもいいし、なくてもいい。

それを勝手だ、といって当然建つであろうと覚悟はきめている私だ。その墓石に刻みこまれるのが私の知らない戒名であることを願ひ下げにしたいというのが最も本心の表白である。全然身におぼえのない名前など刻んだ墓石を背負っているなんて、死んだあとでも背中がむずむずする想いではないか。

また横道にそれだが、大変世俗的なという話にもどる。大体こんな私らしからぬ墓地を持っている因縁を書いておこう。母親が死去した昭和十五年以前、始終泊まりこみで来遊していた中学の同級生吉川喜善（絵描きとしては清）がこの真徳寺の住職で、ある晩大森馬込の私の家に泊まったとき酔ってこの墓地のことを口にしたのである。私はまだ独身で誰かいたはずの相客が帰り吉川が泊まることになった夜の話だ。私の母がこっちにも墓が必要だからと云い出したとたんに吉川はこういった。

「それならいい出物がありませ」

がさつな言葉にはむしろ大まじめでは妙な印象を与えるであろうと惧れる心づかいがひそんでいた。そのときから十年ほど前分家をした私の家で、さらにそれより十余年前に死去した私の父は本籍のあった山形の寒村にある本家の墓地に葬られそこに独立した墓石が建っているのである。こっちにも墓が必要だと母がいったのは、すでに分家している関係上、山形山奥の墓地とは別のものが必要という意味だったのである。母はその両三年後死去したから藤沢赤門真徳寺の墓地はタイミングよく役に立ったというべきであった。母が死去したのは東京芝の病院であったが、葬儀は吉川の手によって行われた。吉川は通夜葬儀さらにその翌日まで泊まりこみで万端取りしきってくれ伴僧たちを帰したあとまで残ってくれた。まだ打合せがあったのである。打合せとは埋葬についての事務的なことで、その五年前私の案内で山形の山奥の本家を同じく中学以来の仲間、鳥海青児とともに訪問したとき見て来た寺の墓地の亡父の墓に母の分骨を収めること、鶴見の総持寺に預けてある亡父の分骨を母の埋葬式のとき同じく赤門の墓地へ葬ることなどの打合せであった。

それ以来三十余年経っているが、カロウトに収めてある墓地というだけで依然として墓碑が建っていないのは、その後戦争中に一度、戦後私がまた鵜沼住人になってからも一基を建てねばなるまいといった私に吉川はそのたびにこう答えたものである。

「墓石なんてバカバカしく高いぜ。それより飲んだほうが功德になるぜ。」

その真意は今になってわかったような気がする。私たち夫婦には子供がいない、

とすれば、一いや、彼はそこに建てるのは私の墓であり妻の墓でそれで終了する
と考えたのではなかったか。つまり、それまで待つという意味をそんな表現に託
したのではなかったか。しかし、これは私の思いすごしかも知れない。彼はすで
に昭和三十一年に死去しもはや真意をたしかめるべくもないのだが。

ここでやっといくらか本筋にもどることができた。吉川喜善死去ののち真徳寺
のあとをおそって住職になっているのは、その息子である。その子供の名前を考
えてくれとたのまれた私はなんの躊躇もなく晴彦という名を口にした。幸い吉川
の気に入った理由はその両三年前に亡くしか長男が昭彦という名の持主だったた
めであろう。吉川が死去したとき彼はまだ高校の生徒だったが、間もなく亡父の
出身校東洋大学を志望し本山遊行寺の試験もパス、亡父の跡をついで赤門真徳寺
の住職になった。そのとき僧侶名はなんとつけたと聞いたところ、晴彦をそのま
まセイゲンと読ませることにしたと答えた。つまり、私のつけた名前がそのまま
残っているのである。私に戒名をつける者がいるとしたら、どうしてもこの晴彦
和尚になるだろう。こっちが名づけ親だから死んだ私に戒名をつければちょっと
した駄ジャレになる、これも悪くはないがもう一度考えるとやはり私自身の知る
ことのない名前を刻んだ墓石の下に埋まるのはなんとも居心地がよくない。よっ
て戒名不要をつよく云いのこす次第だ。晴彦和尚よ、諒承して欲しい。もっとも
墓なんかほんとはどうでもいいのであって、かねてからそういうふう云いおい
ておくつもりだったのが、つい近年そうは行かなくなってしまった。

その事情を述べるとこうなる。私には二人の妹が生存しているが、下の妹が私
が病気で倒れる前年、上の妹の良人と一緒にやって来てかねての約束通り私の墓
地に両家の分も割りこませろと申しこんだ。両家とも長男ではないから先祖伝来
の墓がないというのだ。赤門に相談してみたら、宗旨がちがっても差支えはない
とのことで私は承諾していたのである。大体父親の分骨を預けておいた鶴見の総
持寺と赤門とではまるっきり派がちがうのだが、吉川も私もそんなことにこだわ
らないで墓地を分けてもらったのだから妹たちの申し出を拒む理由はないわけだ
ある。上の妹がそのとき同行しなかったのは、病身で東京から藤沢まで来ること
に困難をおぼえているからであった。妹たち夫婦は私の亡友と面接があったばかり
でなく親しくさえしていたその良人たちだから妹たちの計画に異存がなかった
ものと思われる。異存があったのはむしろ私の方だったかも知れない。私たち夫
婦が死んでここに埋められ、やがて私たちを知っている人たちがみんなこの世か
ら消えうせたあとは無縁佛として雨風にさらされ、そのうち取払いになってしま

う。そういう状態を思い描いていた私とすれば、妹たちの子孫がふと私たちの存在を思い出したりして訪問して来るかも知れないとなればそうは行かないと慌てなければならなかった。(ここでついでにいつておきたいのは、今なんの気もなく私たちと書いてしまったが、これは決して私の死後妻を拘束する意味を含めたものではないことである。妻もすでに五十余歳になったが、私の死後何かの機縁があれば再婚を拒む理由はない。その場合、かの女がほかの墓に埋められるのは当然だからである。もっとも、どっちが先に死ぬかは運命のみの知るところであって、などを書くのは別に厭がらせでもなんでもなく、一いや、よそう。そんな仮定などにまで気を配っていたらいつになったら書き上げることができるかわかったものではない。最初の予定では、三月三日の誕生日までに今年の遺言書として書き上げるつもりであったが、こんなふうに伸びていては不可能かも知れない。今日二月二十五日、別に締切があるわけではないから気のすむまで書きつづけるとしよう。)

私が慌てたのは建てねばならない墓についてであって、死ぬことはあらゆるものとの関係の消え去ることとは承知していながら、とんでもない墓など建てられることはとの想像が生きている現在の私の神経にさわるのである。妹たちやその家族たちのそれと並んで建つとすれば、一応バランスを考える必要もあろう。ここで私の空想は発展して行く。勝手なままに書いてみる。いつのことか予知できないのは残念だが、私が死ぬ。先ず知らせるために必要な電話は次の通りだ。

先きに挙げたふたりの妹。

そこから親戚たちへ伝言をたのむ。

妻の姉兄たちにも電話で知らせる。

すると電話のないところが出て来る。そこへはハガキを出さなければなるまい。そのハガキの文章の原稿をつくっておいた方が親切だろう。妻はなかなか神経のかよった文章を書くが欠点はそれに時間がかかりすぎることである。急を要する場合にその役目を押しつけるのは可哀そうだから、試みに作ってみよう。気に入らなければどう修正してもかまわない。

達夫こと〇日〇時〇分〇〇〇(病名)で死去いたしました。〇日〇時より自宅で告別式を行います。 妻 今井くに子

文芸家協会、ペンクラブ、二十七日会、新聞関係、報道関係などは平松から鹿島孝二氏に相談して計らっていただきたい。

葬儀はできるだけ簡素に願う。今私の目にうかんでいるのは、栗原光三氏の告別式の模様である。吉川晴彦和尚の司会をうけるからには仏教的になるであろうけれども、それはできるだけ「仏教的」であってむしろ無宗教を云いたい私である。日常線香の匂いをさえ拒んでいる私を尊重して欲しいものである。告別式とは誰のために催されるかといえ、もちろん生前のつきあいある人たちのためだから死者にはすでになんの注文をつける権利資格もないのはわかっている上で以上のようなことを書きのこす私の神経を嗤っていただきたい。尚、晴彦和尚に注文したいのは、棺前に造花、ありきたりの供物など一切やめること。焼香もやめ、季節の花を一輪づつ供えることで代えるよう。自然、読経も無用と願いたい。しかし、こういうことを書き並べるのは私の平常心を裏切るものである。葬式は私のためにはちがいないが、同時に遺族のためのものであることを忘れるところであった。つまり私は主体にはちがいないにしても、幾度もくりかえす通り私の知悉するわけに行かない行事である。あれこれと注文をつけるのは以てのほかのお笑いぐさだ。並べ立てた注文はいっさい取り消すことにしようか、がこうして一切をまかせてもかえって迷惑かも知れない。私には奇妙な老婆心みたいなものがあるのを今さら自覚するわけではないが、つい口を出してしまうのはいつだって親切心のためでしかなかったと自負している。

「それはちがうね。こうするんだ。」

などと文句をつける私であることは、身近にいる妻などはイヤになるほど耳にきざみつけているにちがいない。しかし、この場合はちよいとちがう。私はもはや自分の意志など口に出せる身ではなくなっているのだ。いくらやきもきしても私の声や言葉は通じるはずがないのである。それならばおせっかいでもつけるかも知れない文句をあらかじめつけておいた方が親切ということになるのであろうか。このへんのところあまり確かな信念とはまいらない。まあ、やっぱり、どうでもいいことだと訂正しておこうか。しかし、あとは野となれ山となれなどとやけっぱちにふてくされているわけではない、そんなふうに聞えたら前もってあやまっておく。ふてくされるのは悪趣味で、私の賛同するところではないこと信じていただきたい。

またまたわき道にはいつて脱け出すのに困難をおぼえる。今日はこのへんでやめて、明日新しく出直そう。今日は二月二十六日である。誕生日まではまだ五日ある。柄にない遺言書を書き出してしまったのを後悔もしているが、そして誰のために誰に向って書いているのかもあいまいになって来たが、そうかといって破

りすてするには未練がある。まあ、明日どんな気持ちになるかわからないが、明日のことは明日の風にまかせよう。

二月二十七日。薄曇。墓の形について書いておこう。これももちろん死後のことであってみれば強請ではないのはいうまでもない。ただ現在私の目にうかんでいるのを参考のためスケッチしておくだけである。形は高さ一尺五寸ほど、幅一尺ほど奥行六寸ぐらい、表面には今井達夫とだけ刻んでもらいたい。之墓と記す必要はない。見ただけで墓とわかる以上そんなよけいな説明は愚かしいかぎりである。妻が並記を望むならそれもよかろう。しかし、半ば冗談みたいに前記した通り私の死後再婚するかも知れない場合をおもえばかるがるしく結論を出さない方がよかろう。私と妻の死去年月日と行年は横に刻むことにしたい。尚、裏面には亡父母、秀松、きみと幼死した妹ふたりのアサ、ノブの名をそれぞれ死去年月日行年を添えてもらった方がいい。このふたりの妹の遺骨は横浜久保山新善光寺の墓地に埋葬してあったのだが、両親の分骨を赤門墓地に埋めるとき探しに行った私はついに発見することができずこの墓地には何もないのである。母親の分骨は山形の亡父の墓に埋葬したが、そのときもさらに久保山まで行って見たがこれも冗足であった。つまり、私の亡母にはそういう心情はうすかったと見ていいので、かの女は山形山奥の良人の墓を見ることなく死去してしまったのだから、私の死後についてもあまりこころを煩わすことないよう望みたい。私がこんな文章を長々と書いているのを知ったら、おそらく苦笑をうかべるであろうかと思う。

(両親及び妹たちについての必要事項は仏壇内の位牌に記してあるはずだが、この場合位牌にある戒名は抹殺して欲しい。)

私は以前墓碑銘について書いたことがあったが、いうまでもなく現在はそれを取り消しているわけだ。それはその墓碑銘のあまりに自嘲的なのを羞かしく感じるからである。自嘲的なのはそのときの気分として嘘ではなかったがあまりに気負っている調子が、若気の至と気恥ずかしく背筋が寒くなるのである。しかし、お笑い草のため思い出すままに書きつけてみようか。

ほんのすこし詩をつくり

西洋の歌を習いこれを舞台でうたったり

小唄を習い三味線を弾き

野球をやれば補欠的存在だが

一応は文壇チームのレギュラーになり
水泳も独学だが海で泳ぐことを好み
江ノ島から鵠沼まで泳いだのを自慢したりした
しかし、字を書くのが本業で
十篇足らずの戯曲を作ったが
やはり小説といえるかどうかわからない
そういう作品でどうやら米塩の資を
面目ないながら長年かせいで来た
著書の類は五十にあまるが
これといったものがあるわけでもなく
死とともに消え去るのを
むしろ 本望とするものである

すこしちがうかも知れないが、心持としては嘘はない。これをやめた理由は前記のごとく気負い立っていることに忸怩たるものを感じたからだだが、それで次に思いついたのは墓の表面に「寂」の一字を刻むことであつた。この思いつきは随分長い期間私の胸中に住みついていたが、あるひとがそういう墓を建てたと知ったとたんに止めることを自分に命じた。そのひとをいうのではなく、そんな墓をつくった私が気障に感じられるからである。

そういえば、自分の名前だけ刻むのもおかしい話だと鞭うつものがあるのだが、そこまで自分を苛めつけるのも気障ではないかと反省がおそって来る。いっそもなしに焼いて残った骨を粉にして月夜の海にでも投げこんでもらいたいのだが、これが法に触れると知って苦笑したのはいつのことだったろう。余計な邪魔をするやつがいるものだとか苦笑しながら眉をひそめたものだったが、考えてみれば粉にして撒きちらすのは私自身のできる業ではない。そんなことでお咎めをうけたとしたら、咎めるやつも御苦労だが咎められた篤志家が気の毒といわねばなるまい。そうこう考えて来ると、こんなことを書いていること自体がムダであることに気づかねばならない。(まさにその通りなのである。ほんとは何も書かない方がいいのである。それにもかかわらずやめないのは、それがまだ生きている証拠かも知れない。だが、今日はこのへんでやめよう。誕生日までには間まだ三日ある。明日は明日の風が吹くだろう。それをたのしみにしながらペンをおくが、ひと言断っておきたいのは、今まで書いて来たのが全く素面の業だったことであ

る。アルコールの影響一パーセントもなしである。—それにしては呂律が怪しいではないかなどと半畳をとばされるのを予防するため、こっちが先きまわりをした次第だ。

二月二十八日。今日は何を書いたらいいか思いつかないから、夢の話を書きつけておこう。ふと思いついて夢にあらわれた知人友人たちのことを書きとめておく習慣をはじめたのはことしの元日からであるが、それが名前だけだったため内容は大方忘れてしまった。これではなんにもならないからノートにでも思い出す鍵を書きつけておこうかと考え直したのだが、まだ実行のはこびに至らない。明日の三月一日を期してもうすこし詳しい日記をつけることにしようか、などと書いてもはたして実行できるかどうかは怪しいものである。しかし、そういう話をしたら夢に出て来るのが大体故人であることを妻が指摘して、さらにこうつけ加えた。

「もっとも亡くなった方のほうが多いかも知れないわね。」

これは私の胸中を慰める目的のようでもあったが、私は別に縁起をかついだりしないのだから無用のしんしゃくというべきであった。ただその言葉はさまざまな想いを触発することに役立った。今日のそのさまざまな想いというのを並べてみよう。思い出すだけでなくさらに掘り下げることができれば幸運なチャンスというべきであろう。

三十余年前私はすでに故人になった先輩のまだ生きている夢を見たことがある。これだけでは説明不足で夢にあらわれる以上そのひとが生きている状態であるのは当然ではないかと野次られそうだが、ちょっと待っていただきたい。そのひとの亡くなった時期はシナ事変中であつたにもかかわらず夢にあらわれて私としゃべり合つたのは太平洋戦争の戦況推移についてであつた。今でも私の記憶にとどまっているのは、その死去の時日がすでに過去であることであり、それにもかかわらずそのひとの言葉は私の知識を越えしかも納得させるものであつたこと、しかし、ここまではまだいい、私の知識を越えているにせよ私の胸底で求めているもののあらわれだったという解釈も成り立つのだが、奇妙なのはそのひとがすでに故人であることに気づきはしないか、気づいたとたんそのひとはしゃべることをやめ私の前から消え去ってしまうのではないか、それを恐れている私の心持であつた。そういうものを信じるひとたちだったら、こういうのを夢のお告げなどとはやし立てるであろうが残念ながら私は否定派である。

しかし、この話は以前しゃべったり書いたりしたことがあるから、このへんでやめることにして、現在にもどろう。夢のなかにあらわれる人物がすでに故人であることを夢のなかでこちらが知っている場合を考えてみる、またそれとは知らずにしゃべり合ってさめてから今のは夢だったのかとくやしがる場合もあるが、この差は何によって生じるのであろうか。これを解くのは難問題で、その夢をみたひとのそのときの状態、相手に対する心情、その他あらゆる条件を計算しても尚正しい答が出て来る可能性は乏しいであろう。私だけの場合に限ってみようか。その生前にもう一度逢っておきたかった相手が夢に出てくるとはかぎらないのは不思議で、どうにも解釈しかねる事実である。この問題は慌てて解釈を下さない方がいいようでもある。もっとこまかく考えてみることにしたい。

三月一日。これは遺言書のつもりで書きはじめたものである。夢の話などわき道にそれすぎたのを修正しなければなるまい。必要なのはもっと事務的な事柄である。しかし、またしてもそんな事柄を書きつづる虚しさをかんじる私は、はたして何を望んでいるのかと自問自答せざるを得ない。ほんとは何も求め望んではない私だといってしまえばそれまでなのだが、そう云い切ることには若干の心残りがあるとすればたぶん私より年長の人たちに先立つ不可解な疑問の解かずじまいであるといおうか。この数年間私より若い友人たちの死去に合っている私がこんなことを書くのは未練がましい次第だが、そして未練がましい私を十分みとめた上で、人生というものがもっと合理的に年齢の順序にしたがって消え去るものであったら、おそらく宗教も哲学も発生することなくまことに単純な一生が与えられたであろうと空想するのである。いや、またしても不要な言葉を書きつけてしまった。この心持を要約すれば、死にたくない希望と結びつくかも知れない。たしかに私は現在死にたいと思っていない、が、ある時間には死ぬことも仕方ないことであろうと諦めに心持を委ねている自分を見出すこともある。これは以前にはなかった心持の推移で、病気をして発作を起こし意識を失っていたのちの危篤状態にあってさえかんじなかった心境である。しかし、それは一日中のごくすくない部分の時間内だけでたちまち死を拒絶する心持にもどってしまう。とすれば私のなかには生命力というか生存欲というかそういうものが残っているとみとめるべきかと考える。脳溢血による病院生活を満八ヶ月に近くつづけて来た私とすれば、退院後の年月は儲けものだと言ってみるものの、入院中一度も死の訪れを予感したことさえなかったのは、あるいはそういう予感をかもし出すほ

どの脳力がうすれていたのでしょうか。以来満四年を越えた現在それが恢復したというのでしょうか。このへんは極めてあいまいである。もっと考えてみたい。

十余年前カゼをひき肺炎予防のために打とうかといった医師の言葉にしたがつて受けたストマイ注射はたった二本だったのに、神経性難聴という後遺症を私に与えた。その後ときたま起こる幻聴を私はむしろ興味を以って温存しているが、幻聴についての自覚はなかった私である。かりに失神状態におちいつていた病院初期のころにあっても、夢に出て来た現象を合理的に解釈していた、不思議な話だが。それが退院して自宅へ帰ってから、幻覚と呼ぶべき状態を三度にわたって経験したのである。その奇妙な印象は随分うすれてしまったが、思い出しても気味悪い心持がよみがえって来る。今のうちに書きとめておいた方がこれを読むひとに親切かと思う。やってみよう。

三月二日。昨日の続きを書こう。夜中にふと目がさめたとき目の前に私の顔が写っているのを見た。それは鏡にうつっているように見えたのだが、翌朝ほんとに目がさめてみるとそれが幻覚であったことを悟らなければならなかった。それはたしかに私の顔であり眼鏡をかけていたところまではっきりと見ている。そして顔いろまで現在の私のそれであることまで認識しているのである。夢だったのではないかと考えてみたり白昼町角などでひょっこり自分自身に出合ったりする話を思い出したり、しばらくは変な心持になやまされていたが、これという異変の起ることなくすでに三年ほどの月日が流れ去った。もうひとつは同じく夜中に目がさめたときだ、隣の寝床に眠っている妻の顔がはっきり見えたのである。枕もとのスタンドランプは消してあり、室内は薄明りの状態だったと思ったのに朝になってみるともっと暗くてそんな顔など見える筈がないのである。私はこの二度の経験を幻覚だったと結論を出し、何か異変の起ることを覚悟していたのだが結局なんのこともなかったのだから、ますます迷信的気分は否定することになった。それにしても私の顔はたしかに鏡のうつしたそれであることを額の黒子のありかでたしかめなかったのを残念に思う。しかし、この二回の経験はその後くりかえしていないが、夢でなかったことも確信を持っている。

私は迷信というものには全く否定的であるにもかかわらず、迷信的事実に対しては好奇心をそそられる弱点を持っている。自分ながら幼稚だと苦笑を禁じ得ないのだが、妖怪譚とか辻褄の合わない話とかには興味を禁じることができないのである。もっともこんなことを並べ立ててもそれが私の求めているものより次元

が低いことを承知しているからと指摘されれば、一応もなく頭を下げてしまわねばならない私である。否定派だから好奇心興味を無責任にそそられるのだという自覚も十分持っているのだと自慢しておこうか。いや、ますます冗話がすぎるようだ。明日は誕生日だからといってひとつの区切りになるわけではない。それにもかかわらず若干こだわったのはやはり遺言書など書き出したからかも知れない。去年は冗談半分だったのにことはいくらか本気で取り組んだのは、いうまでもなくこの一年間に年来の親友を亡くしている影響だったと思う。しかし、誕生日をひとつの区切りと考えるとすれば、それは退屈派の遊びにすぎまい。明日の三日にはまだ死にそうもない私だから。しかし、どんなことが起るかはや予測できないという方が常識的だろう。つまり、明日にかぎらず来年の誕生日に三回目の遺言書を書けるや否や、それが現在の私に与えられた宿題というべきであろうか。

三月三日。今日は六十九回目に誕生日である。生れたのは午前十時ごろだったらしい。野毛三丁目の家から父たちが本町の店へ出かけたあとと聞いているが、たしかな時刻についてはなんの証左もない。役所というところは死亡時刻は正確に書き入れることを求め医師の証明を要するというけれども、生れた方は、はなはだ杜撰である。おかしい話だ。その時刻もすぎて現在十一時半になろうとしている。それがどうというわけではないが、今日は一応祝盃をあげることにしよう。支離滅裂な文章になってしまったが、これでも昭和四十八年度の遺言書とうけとってもらいたい。

昭和四十八年三月三日

今井 達夫

故今井達夫氏の遺稿から、鵜沼に関するものを掲載することにしました。その経緯は編集後記をご覧ください。

今回はその第1回目として、1973年2月25日から3月3日にかけて記された『遺言書』を掲載します。法的な遺言状ではなく、脳溢血で入院後、毎年誕生日を機に、死に関する心構えを綴ったものと思われます。

病気により右手が不自由になり、左手で書かれた原稿です。

「鵠沼を語る会」活動の記録

(平成 18 年 10 月～平成 19 年 3 月)

総務部

運営委員会 9 月 26 日(火) 10 名出席

平成 18 年 10 月例会 10 月 10 日(火) 10 時～12 時 25 名出席

- 議題 1. 公民館まつりについて—10 月 21 日(土)～22 日(日)に行われる公民館まつりについて、展示会場は 1 階奥階段横の図書室入り口、内容は、鵠沼の蝶、トンボ、メダカ、くげぬまらん、田字草等の「鵠沼の生物」とする。展示制作は公民館まつり実行委員会のメンバー中心に、19、20 日鵠南市民の家で準備する。また、まつり当日の会場当番と、パネル設置、スーパーボールすくいの担当者を出席会員の中からそれぞれ決めた。(竹内、内藤)
2. 会誌「鵠沼 93 号」配付について—出席会員に渡し、他は配付表にもとづいて担当者に配付依頼した。(有田、中島)

お話—竹内会員より、公民館まつりの展示内容の一つである、「鵠沼の蝶」について永年にわたって採取収集した標本を示し、カラーの写真を掲げながら説明された。(竹内)

運営委員会 10 月 30 日(火) 10 名出席

平成 18 年 11 月例会 11 月 14 日(火) 10 時～12 時 28 名出席

- 議題 1. 公民館まつりの報告と反省—10 月 21 日、22 日の公民館まつりで「鵠沼の生き物たち」の展示を行った。今までのテーマと違う切り口であり、全ての生き物と言うわけにもいかず、かなり主観的な展示となった。展示を見た人には年齢を問わず好評であった。反省点としては、1 階奥の廊下のため、資料室に行く人たちが素通りしてしまうことが多かった。(竹内)
2. 新年会について—例年通り来年(平成 19 年)の新年会を例会に続いて行うことになった。1 月 16 日第三火曜日に、マリンロード鵠沼の「アコレード」で会費 3,000 円と決めた。(有田)
3. その他(1)10 月 31 日、有田、佐藤和会員が鵠中校外授業で「鵠沼と芥川龍之介について」の講師をした。(2)作家今井達夫氏の遺品(文書類)を、未亡人が老人ホームに入居することになり青木会員が預かった。(有田)(3)林達夫氏の長男が死亡したため、相続が発生し、借地だったので庭の部分地主に返還することになり、由緒ある英国風な庭園が壊されることになった。会員から何とか保存できないかとの声あり。(岡田)

お話—小林会員より「鵠沼という地名を考える」という興味深い話があった。

運営委員会 11 月 28 日(火) 10 名出席

平成 18 年 12 月例会 12 月 12 日(火) 10 時～12 時 22 名出席

議題 1. 新年会について—前月に発表した、来月は例年恒例の新年会を「アコレード」で、1 月例会のあとで行うことにした。1 月 16 日(火)11 時 30 分に例会、12 時より新年会。新年会役員、ビンゴ担当それぞれ決めた。(岡田) 例会出席者で参加予定者から会費を徴収した。(桑原)

2. サークル交歓会報告—公民館まつりの反省が主な内容で、バザーや飲食販売に人が集まったために、人の流れが外に向いてしまって、館内の展示を見る人が少なくなったとの指摘があった。(佐藤和)

3. 会誌「鶴沼 94 号」について—今のところ原稿を予定しているのは、「鶴沼の地名について」「伏見稻荷について」「長谷川巳之吉について」「福地誠一について」であるとのこと。また、文章の校正に詳しい穴山会員が新編集委員に指名された。(渡部)

お話—例会終了後、出席者全員が鶴沼郷土資料室で「駅周辺商店街の移り変わり」と、鶴沼公民館のあゆみ」展を観覧し、各展示担当者より内容の説明を受けた。

この後、「内藤千代子」を卒論のテーマとして研究している東大大学院生嵯峨景子さんが来られ、有志でゆかりの場所(千代子旧居跡、墓のある万福寺等)を案内した。

運営委員会 12 月 19 日(火) 12 名出席

平成 19 年 1 月例会及び新年会 1 月 16 日(火) 11 時半～14 時 28 名出席

場所 マリンロード鶴沼・軽飲食ギャラリーラウンジ「アコレード」

1 月例会 議題 1. 会誌「鶴沼 94 号」について—1 月現在の原稿予定が発表され、出席会員からの原稿歓迎との発言があった。(渡部)

2. その他—(1) 旧後藤医院はかねてより持ち主の意向で売却手配中であるが、貴重な和洋折衷の建物を売却されれば買主の判断で壊されてしまうおそれもあるので、藤沢市が保存し地域のために活用してもらいたい旨の要望書を「鶴沼の緑と景観を守る会」と連名で市長宛出すことを提案し了承された。(有田) (2) 現在、会のホームページは杉本会員名義になっていたが、それを会の名義に替える。委員長に竹内会員にしたい。(杉本)

新年会—例会終了後中島会員の司会で行われ、会長の新年の挨拶に続いて、年男である内藤会員の音頭で乾杯したあと懇談会食に入った。宴たけなわで簡単な自己紹介を兼ねた今年の抱負などをスピーチしたが、つい熱が入って長くなってしまう会員もあり、見かねて高田会員が時計係となって時間を制限するハプニングがあつて大いに盛り上がり、最後は、内藤、竹内会員の尽力で楽しいビンゴが行われ和気藹々の内にお開きとなった。

運営委員会 1 月 30 日(火) 9 名出席

平成 19 年 2 月例会 2 月 13 日(火) 10 時～12 時 29 名出席

議題 1. 新年会の報告—担当幹事より収支報告があり、収入 90000 円、支出

88200 円で残金の 1800 円は、会の会計に繰り入れることにした。(佐藤和)

2. 会誌「鶴沼 94 号」について—今のところ原稿が手許にあるのは、小林会員の「鶴沼という地名を考える」だけである。出稿予定のものをよろしく
お願いしたい。(渡部)

3. その他(1)例会、運営委員会の部屋取り当番について出席会員に協力要請した。(佐藤和)(2)「鶴沼の緑と景観を守る会」と連名で旧後藤医院保存の市長宛要望書を読み上げ承認された。(有田)(2)2 月 15 日より鶴沼郷土資料展示室で新たな「なつかしき学びその三、鶴洋小学校と思い出の鶴沼スナップ展」が始まると報告あり。(内藤)

お話—1 月 28 日(火)18 時 30 分よりテレビ朝日放送で放映された TV 番組、「グレートマザー物語—中島誠之助」のビデオを放映し、中島氏と幼少の頃の友人であった有田会員より、「中島誠之助と鶴沼」について話があった。今、テレビ等のメディアで大活躍している陶磁器鑑定家、誠之助氏の数奇な生い立ちが語られて感銘を受けた。

運営委員会 2 月 27 日(火) 10 名出席

平成 19 年 3 月例会 3 月 13 日(火) 10 時～12 時 23 名出席

議題 1. サークル交歓会の報告—2 月 20 日(火)に行われた。現在加盟サークルは約 230 団体もあり、毎週活動しているサークルは部屋取りに苦勞している。当日の部屋取りが出来なくて不便だと言う声が多かった。(佐藤和)

2. 会誌「鶴沼 94 号」について—予定原稿に若干の変更があり、ゆとりができたので、過日整理した今井達夫氏の未発表原稿の中から、「遺言書」を掲載したい。今後会誌紙面にゆとりのある時には、同様に掲載できるよう今井未亡人の承諾を得ている。(渡部)

3. その他(1)公民館利用登録届書、サークル確認書を 4 月 20 日までに公民館へ提出することになった。(岡田)(2)一本通りの小田急踏切際にある、「中岡耕地整理紀功碑」が 3 月 5 日(月)にクレーンにて撤去されて、11 日(日)にセンター裏庭に移設されたと報告あり。(中島)

お話—例会終了後、今鶴沼郷土資料展示室で展示開催中の、「なつかしき学び舎その 3・鶴洋小学校、鶴沼の思い出スナップ展」を観覧し、展示担当者の渡部、内藤両会員より内容の説明があった。

なお、この後センター裏庭にある紀功碑を皆で見て、運営委員はもう一度部屋に戻り、渡部、岡田両会員より今井達夫氏遺品の中から、今回会誌「鶴沼 94 号」に掲載することにした経緯の説明があり、今後にも必要に応じて掲載することの了解を得た。(文責 中島 明)

編集後記

*最初に前号の訂正をしておかなければなりません。

14ページの「富士 山氏略年譜」の冒頭の欄に「東京にて誕生」とありますが、正しくは「石川県金沢市野田寺町にて誕生」です。

*さて、今号は前号に載せきれなかった長谷川巳之吉について、冒頭で特集しました。

*長谷川巳之吉は、林達夫と共に昭和期の鵠沼を代表する文化人といえます。その真骨頂は、戦後の混乱期に「湘南文庫」と「鵠沼夏期自由大学」を開いたことでしょう。

*もう一つ、長谷川と林の共通点は、古民家を移築し、自分のコンセプトで改造した自宅を造ったことです。その旧長谷川邸を現在の所有者であるS氏のご厚意により会員数名で拝見することができました。その結果を岡田会員と佐藤弘会員にまとめていただきました。

*続いて、昨年の例会講話から小林会員に鵠沼の地名、田村宮司に鵠沼伏見稲荷神社の創建についてまとめていただきました。

*1月28日、テレビ朝日の「グレートマザー物語」で陶磁器鑑定家として知られる中島誠之助氏の波乱に満ちた半生が紹介されました。幼少期、養母と過ごした鵠沼海岸の紹介に同級生だった有田会長も出演されました。中島氏は企業誌「シャクリーサーヴェイ」2006年3-4月号に有田商店の筋向かいに建つ柳川理髪店の思い出を掲載されました。その転載を依頼し、快諾を得ました。感謝いたします。

*有田・佐藤和子会員の「悠々荘」「大給家」に関連し、それを機に見つけた話題が内藤多仲と大給子爵家についてです。

*故今井達夫氏のくに子夫人が老人施設に入居されるのに際し、遺品を整理され、未発表の原稿やノート類、写真などの処理を鵠沼を語る会に委託されました。会としてはこれらを活字化し、鵠沼に関するものは逐次会誌に掲載し、将来できれば出版物にしたいと考えています。今回はその第1回目として、亡くなる5年前に記された『遺言書』を掲載します。

(渡部)

『鵠沼』 第94号

平成19年3月31日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵠沼を語る会
藤沢市鵠沼海岸2-10-3
鵠沼公民館内
電話0466-33-2002

URL=<http://kugenuma.sakura.ne.jp/>